

「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」

vol.4

「青短の教育70年の軌跡」



1982年度卒業アルバムより

青山学院女子短期大学では、70周年記念ギャラリー展「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」を2019年度から2020年度にかけて、4回にわたって開催してきました。最終回は「青短の教育70年の軌跡」と題して、各学科や特色ある科目群など、短大の教育の歴史を振り返ります。

会期：2020年 **10月12日(月)～11月7日(土)**

会場：短大ジェンダー研究所（研究棟1階／入口は礼拝堂斜め向かい）

時間：平日 9:00～18:20 / 土曜日 9:00～15:00 ※日曜日休み

- I 学科による教育の展開
- II 特色ある教育
- III 研究活動
- IV 学生の活動

主催：青山学院女子短期大学

企画主体：総合文化研究所研究プロジェクト「大学におけるジェンダー教育と男女共生社会」

運営主体：ジェンダー研究所

協力：青山学院資料センター・短大同窓会・広報企画委員会



vol.4 「青短の教育 70年の軌跡」

会期：2020.10.12-11.7

会場：ジェンダー研究所

青山学院女子短期大学 70 周年記念ギャラリー展  
「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」  
vol.4 「青短の教育 70 年の軌跡」

ごあいさつ

青山学院女子短期大学学長 河見 誠

ギャラリー展「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」は、第1回「青短の源流を訪ねて」において戦前・戦中のいわば青短前史、第2回「青短の誕生と発展」において戦後の女子専門学校・青短史を見通したのち、第3回「ミッション × 女子教育 × ジェンダー」において青山学院における女子教育の歴史全体を、ミッションとジェンダーという切り口から捉える試みを行いました。

最終回となる第4回のテーマは「青短の教育 70 年の軌跡」です。女子小学校から女子専門学校までの女子教育のバトンを受け継いで、青山学院女子短期大学が女性のエンパワーメントをどのように展開してきたのか、その具体的な取り組みを提示します。

教育の軌跡を辿っていく中で、バラエティに富んだカリキュラムの豊かさと共に、それらの全体を貫くものは、深く徹底的な「人間」の探究を基盤に据えた女性のエンパワーメントとしての教養教育の追求であった、ということが見て取れるでしょう。

そして、多岐にわたる専門分野の教員たちが、研究においても教育においても、いかに真剣な共同作業を行ってきたか。またそのような環境の中でいかに学生たちが生き生きと活動してきたか。その中核においていかに「キリスト教」教育が柱として位置づけられ、愛と奉仕の精神が生きていたか。こういった本学の教育の確かな足跡を証する展示になっていれば幸いです。

本学は 2018 年度本科学生募集停止を決めました。2021 年度専攻科生が最後の入学生となります。ここに展示された各パネルを見るほど、これまでの 70 年にわたる豊かな導きに感謝あるのみです。しかし女性のエンパワーメントは依然として大きな社会課題であり、そして新たな時代を切り拓くためにはジェンダーの観点が益々必要になってきていると言えるでしょう。青山学院女子短期大学設立からの 70 年、そして女子小学校から始まる 146 年にわたり、教職員、学生はじめこの教育共同体に集う一人ひとりによって積み上げられてきた本学の女子教育の実りを、どのように総括し、発展的に継承していくか。それは、青山学院が未来に向けてビジョンを見出していくための 21 世紀の「ミッション」の一つであると私たちは考えます。4 回にわたるこのギャラリー展が、そのバトンとなることを願います。

# I 学科による教育の展開

## 国文学科の教育

藤本 勝義（青山学院女子短期大学名誉教授）

従来、国文学科では科の方針として、文学作品講読に偏らず文化や創作指導を重視して、「童話」や「俳句」さらには「短歌」の創作などの授業を設けてきた。ただし、カリキュラム等について、社会情勢、教育環境や学生のニーズに鑑み、少しずつ改正を行っていった。特に大きな変革は1998年度に始まる。下記の表のように学びの内容を四つに系列化した。そして、まず演習科目を少人数制にした。さらに選択科目を増やし、大半の科目を通年ではなく半期制にして、学生の希望する内容の授業をできるだけ選択できるようにした。選択科目の総単数が従来の60から164単位という大幅な増加を実現させた。通年の必修の演習科目も、従来、事務的にクラスを割り振りしていたものを、学生に内容を検討させて希望により少人数のクラスを編成するようになった。

これまでは大半の科目を通年で受講しなければならなかった。学生はシラバスを見て受講科目を決めるわけだが、受講して初めて思っていた内容と違うことに気付くことが少なくない。同じ科目名のIとIIを複数設け、前期にA先生のIを受講し、後期にはB先生のIIを取ることができるようになり、それぞれの単位が認定された。シラバス自体も具体的なものに改善され、受講時に細かい内容を知ることができるようになった。特に2年次では、必修科目の単位を取れなければ留年になるので、複数の同名科目から自分の受講したい内容等のものを選ぶのは、学生だけではなく担当教員にとっても良いことであった。

また新たに卒業論文に関して「卒業制作」として、「創作短歌」と「創作小説」の授業を新設して学生には好評であった。卒業後も詠歌や小説創作を続けていくような者が何人も出た。さらに「能・狂言」また「映像と文学」



1995年



1997年



1998年



1999年

### 国文学科「四つの系列」

※1998年のカリキュラム改正後

#### 日本語学の分野

日本語の特質を客観的、科学的に把握する力を養う。また、日本語の変遷について広く学ぶ

#### 日本文学の分野

日本の古典文学・近代文学・現代文学について、深く鋭い視点から解釈し鑑賞し、批判する力を養う

#### 創作の分野

日本語での創作や表現演習などを通して自己表現の方法を培う

#### 隣接する分野

映画、メディア論、文化史など、日本語日本文学に隣接する分野を研究し、広い視野を身につける

というメディア関連の科目も新設された。

一方、一年生のオリエンテーションでは、文学散歩とは別に、歌舞伎座での歌舞伎鑑賞が設定され意義深いものとなった。故鹿倉秀典先生のご尽力によるものであった。入学したばかりの学生にとって刺激的で感銘を受ける行事となった。

国文学科の多様で特色ある科目群を、自らの関心をもとに選択する学生たちの中には、さらに勉学を深めたいと考える者が出てきても当然である。専攻科国文専攻はほぼ少人数による授業で、修了論文は個人指導が徹底され、本科の勉学を一層深めることになった。

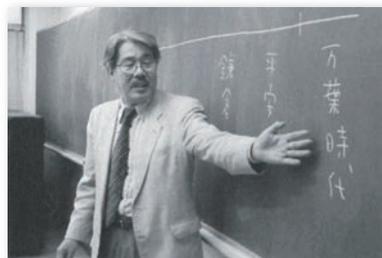
一方、四年制大学への編入希望者が年々増えていき、国文学科卒業生の20人以上が編入して行くようになった。青山学院大学だけでなく学習院大学、立教大学、埼玉大学、お茶の水女子大学などへ進み、2年の後、教員採用試験に合格して中学や高校教諭になっていく者が何人も出た。大学院へ進学して研究者になった者もいる。これも青短の志向する多様な人生や職業選択の結果と言えよう。編入した卒業生たちからも、青短国文学科での2年間の授業を中心とした学生生活のすばらしさが言われてきた。

尚、教職員の研究活動に関しては、1991年に短大総合文化研究所が設立され、国文学科所属であった栗坪良樹学長のもとに研究所年報が発行されていった。国文学科関係の教員たちの研究プロジェクトも立ち上げ、学界から注目される成果も上げている。無論、他学科の先生方との合同研究プロジェクトへの参加も幾度となくあった。

かような短大国文学科の教育がほとんど継承されなくなるのは、卒業生のみならず私も退職した教員にとっても、大変残念であることを付言しておきたい。



2000年



2001年



2002年



2011年

# I 学科による教育の展開

## 英文学科の教育

加納 孝代 (青山学院女子短期大学名誉教授)

青山学院女子短期大学の英文学科は昭和 25 年発足時から人気が高かった。その後も日本の経済復興と高度成長に呼応するかのように、数十年にわたって、つねに多数の志願者を集め続けた。

しかしただ「英文」のみを教えるというのはあまりに「狭い」のではないか、という問いが学長になったばかりの島崎通夫先生から投げかけられた。1980 年代のはじめごろである。島崎先生が危惧されたのは、英文学科には学んだ「英文」を社会のなかで生かそう、あるいは、よりよい社会を作るために役に立てよう、という意識が希薄過ぎはしないかということであった。島崎先生の考えの背後にはキリスト者としての責任感があったように思う。

英文学科は島崎先生が指摘された「役に立つ英語」「使える英語」という視点もたしかに必要な、と意識し始めた。それが具体化したのが英文学科の専攻分離である。英文学科が「英文学専攻」と「英語学専攻」の二つに分けられた(1983 年)。

驚いたことに「英語学専攻」は誕生と同時に大人気を得た。「英文」が「英文」学と「英語」学の二つに区別されたことで、志願者は自分が学びたいのは「英文」ではない、「英語」なのだ、と思ったのだった。実はそれは大半の英文学科教員の意識とはずれていた。教員側は英文学、米文学をそれほど「狭い」とは思っておらず、取り上げ方によっては、歴史も社会も文化も心理学も包含し得る、豊かで優れた素材であると感じていた。それなのに、文学作品の面白さに惹かれてつい狭い世界の中に遊び過ぎていたかもしれない、と反省もした。

だが皮肉ともいえるが、専攻を分けると、用意する科目もそれぞれが特色を持つことが期待される。英語学専攻は「役に立つ英語」「使える英語」を目指して、ネイティブの教員による授業を数多くそろえた。さらに語学だけというわけにはゆかないから、アメリカとイギリスの社会、歴史、文化といっ



1960 年頃



第 3 代学長 島崎通夫先生



1984 年頃



英文学科の教員 1986 年頃

た科目がならんだ。いわゆる地域研究、今振り返ればカルチュラルスタディーズ的なものが導入されたのである。

それにたいして、英文学専攻ではそういう科目は置くことができない。ネイティブ教師による「使える英語」の科目も表立っては多くは置けない。その結果英文学専攻の科目は一見すると「旧態依然」に見えた。教員側の意識はそうではなかったのだが。

英語学専攻ができると志望倍率ではつねに英語学が英文学を上回った。併願も可能だったから、第一志望は圧倒的に英語学科だということも一目瞭然であった。英文学専攻の教員は苦しい立場に置かれた。自分たちは文学を決して狭くはとらえておらず、歴史や社会と関わらせて、人間の問題として探求している。しかしそれが科目名には反映できない。英語力にしても英語学専攻の「使える英語」レベルが文学の学びにも必要なのはいままでもないが、英語学専攻が特色をネイティブによる授業数の多さだと謳っている以上、それよりは少ない数で抑えよと要求される・・・。

1980年代の英語学専攻の誕生に大きな力を発揮されたのはアメリカ人宣教師で短期大学教授のエリザベス・クラーク先生であった。クラーク先生は太平洋戦争終結直後に日本の復興を助けようと来日したいいわゆるJ3（ジェイ・スリー）の一人。その後福岡女学院、長崎の活水女子大学、そして青山学院



エリザベス・クラーク先生  
1985年

と、日本での女子の高等教育の発展を願って奮闘してこられた。先生の長年の願いである、英米や国際社会について、英語をツールとして学ぶ、という信念が英語学専攻という新しいコースの構想に生かされていった。「英語は学びのゴールではない、何かを学ぶツールなのです」が先生の口癖だった。「それを使ってあなたは何をしたいのか、それをよく考えなさい」という先生の教えは、多くの教え子の胸に強く記憶されている。

クラーク先生のもう一つの功績はネイティブの英語教師たちを厚遇されたことである。それまでは英文学科の教員でさえ「外人教師」「フォーリン・ティーチャー」「ノンジャパ」などと呼んでいた約10人ほどを、たんなるスポット的な非常勤講師ではなく、ほんの少しだが専任に近い立場に位置づけ、英語学専攻の主要科目の担い手とされた。彼らを「インタナショナル・ティーチャー」と呼ぼう、とこれも



グリーンパーティーでインターナショナル・ティーチャーを紹介するクラーク先生 1986年頃



1990年頃



1994年頃

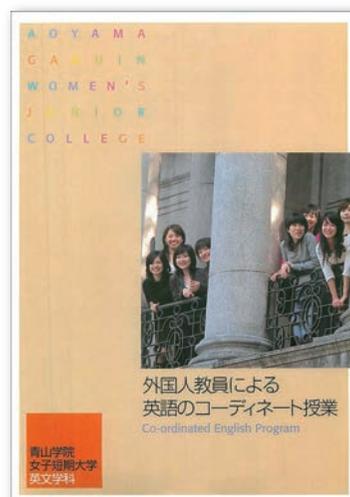
もクラーク先生の提案であった。

多くの時間を構内で過ごすことができるようになった「インタナショナル・ティーチャー」は共同で教材を開発し、互いの授業の進捗を報告し合い、グループとして学生の教育にあたった。これがのちに(2002年)文部科学省から「特色ある教育」(通称GP)に選ばれ、多額の補助金を3年にわたって受けとるプログラムにまで成長したのである。全国的に見ても「さきがけ」的な試みであった。

一方の英文学専攻であるが、すぐれた文学作品を教材として「人間性」にせまろうという教員たちの思いとは裏腹に、志望者は増えなかった。そこで文学専攻のほうでも「インタナショナル・ティーチャー」が開発した魅力ある英語教育プログラムをそっくり実施する方向へと進んでいった。理屈や理念よりも学生が学びたいものを提供するのが良い、という方針を取ったのである。

すぐれた文学作品を教材に、精読を通してまずは深く、次に周囲に目を向けさせて広く学ばせる、という教育方法は、今からみてもきわめて正統的かつ価値あるものである。しかし一時期、「使える英語」希求の波に押されて影が薄くなっていった、というのが1980年代からの20年、30年ほどの動きだったのであろう。

ところで「使える英語」がそのまま「役に立つ英語」ではない。ことはそれほど単純ではない。そうしたこともその後の数十年で、教師たちは感じてゆくことになる。結局ものごとは正から反へ、そして合へと、いわば螺旋状に進んでゆくのかもしれない。島崎元学長が求められた、「英語を通して世の中の役に立つような生き方を英文学科では教育してほしい」という言葉と、クラーク先生の信念「英語はツールですよ、それを使ってあなたはこの世を少しでも良いものにしなければいけません」は、同じことのように思われる。教育とはそのための素材を探し続けること、そのための方法を試し続けることに帰結するのだろう。



コーディネイト授業のパンフレット 2006年発行



インターナショナル・ティーチャーズ 2010年頃



第34回スピーチコンテスト 2016年

スピーチコンテスト：1983年に始まり、2012年の改組後は現代教養学科国際専攻に引き継がれ、2018年の第36回まで継続。1年生の参加者が統一テーマのもとで原稿を作成し、インターナショナル・ティーチャーズの個別指導を受けながら練習を重ねる。このコンテストは英語の能力を磨くだけでなく、自らの意見をまとめ、プレゼンテーションする力を養う機会になる。

# I 学科による教育の展開

## 家政学科の教育

阿部 幸子（青山学院女子短期大学 第5代学長）

家政学科は1950年、旧制の女子専門学校家政科を改組して入学定員100名、一般家政系の教科編成を持った学科としてスタートしました。その後時代と共に社会の要請なども組み入れ、常にカリキュラムの見直しを図り、教養教育としての家政学を学ぶ場として歩み続けてきました。発足時から栄養士などの資格を出さなかったことも大きな特色です。以下に、カリキュラムの大幅な変更を伴うカリキュラムの変化について概観してみましょう。

### I 1950年から15年間のカリキュラム

発足当初から実験実習を基軸としつつ、家政(学)科の科学化を目指したカリキュラムが組まれました。発足時には木造の本館及び別館に調理・試食室、洗濯・染色室、裁縫室、化学実験室、物理実験室などの実験実習設備が整えられ、文部省からも新設短大のモデル校として紹介され、他大学の先生方が視察に来られたと聞いています。発足時のカリキュラムは科目数も少なく、基本的、限定的なものでしたが、年ごとに科目を増やし、実験実習に力を入れました。しかし受動的な学習環境の中で、自発的な学習の場を確保するため、56年度にはテーマを決めて研究的な勉学ができる「家政特別研究」が導入され、それ以降の家政(学)科の教育の特色になっています。



被服整理学／洗濯室

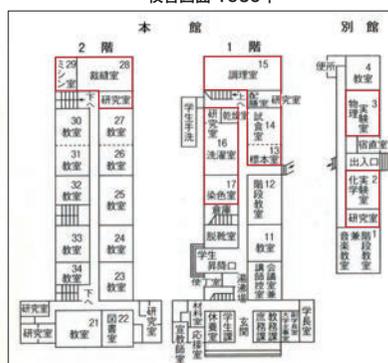


調理実習 1955年頃

カリキュラム（1961年）

| 科目       | 単位数 | 科目       | 単位数 |
|----------|-----|----------|-----|
| 家庭管理学    | 2   | 被服文化論 I  | 1   |
| 家庭経済学    | 2   | II       | 1   |
| 生活美学     | 2   | III      | 1   |
| 栄養学      | 2   | IV       | 1   |
| 食品学 I    | 2   | 被服構成実習 I | 0.5 |
| II       | 2   | II       | 0.5 |
| 食物及調理学 I | 1   | III      | 0.5 |
| II       | 1   | IV       | 0.5 |
| III      | 1   | 住居学      | 2   |
| IV       | 1   | 家庭機械及工作  | 2   |
| 調理実習 I   | 0.5 | 生理学      | 2   |
| II       | 0.5 | 衛生学      | 4   |
| III      | 0.5 | 育児学      | 2   |
| IV       | 0.5 | 家庭看護     | 2   |
| 被服材料学    | 2   | 家政特別研究   | 4   |
| 被服整理学 I  | 2   | 学校保健     | 4   |
| II       | 2   |          |     |

校舎図面 1950年



### II コース制の導入

1960年頃には短大の新校舎建築計画が定められ、実験実習室が大幅に整備される新校舎完成後を目指してカリキュラムの大幅な改編が始められました。まず、前段階として各教科の理論面での充実と実験実習時間の確保のため、各領域の分化、整備が行われました。例えば基幹科目として家政学原論が独立し、食物、被服関係の科目は理論面と実験実習とが分離されて時間数の増加が図られました。61年には2クラスから3クラス編成になり、実験科目の充実に合わせて教員3名が着任、大西セチ、野村万千代、島崎通夫の開設当時からのベテランの先生方

と併せて専任教員は6名、南校舎の完成までの期間を新校舎の建設プランや新しいカリキュラムの検討に力を注ぎました。斬新で、これからの生活に必要な学科目を加えたカリキュラムが編み出され、道筋をたてて学生が勉学できるように、IIコース制のカリキュラムが誕生しました。生活デザインを学科の中心に置くという考え方は、家政系の大学・短大のなかでも初めての試みでした。

67年度には、完成した南校舎に移り、デザイン系の専任教員を得て、本格的にIIコース制を導入、各コース2クラスずつの4クラス編成になり学生数も増員となりました。

このコース制の特徴は、家政学の多岐にわたる分野を総合的に学習するのではなく、Iコースは生活の諸局面の分析とアプローチ、即ち科学的理解の徹底的深化を図るものであり、IIコースは生活を社会と家庭との構成面から理解し、創造的に設計する、広い意味での生活デザインを主旨とするものでした。Iコースでは、「栄養学」「食品学」「被服材料学」「被服整理学」などの講義と実験が必修、IIコースでは「環境構成論」「色彩学」「被服構成論」及び関連の実習科目が必修、全体の共通科目として「生活デザイン」(家政学原論に代わるもの)、「調理学」及び実習、等の科目が置かれています。その後も、学生の受容能力や教授効率などから部分的な変更が行われ、時代を反映して「商品学・流通論」「現代技術」「人間工学」「消費者経済学」「環境科学」などの共通科目や演習科目を新設、現代社会に即応した本学特有のカリキュラムが設けられました。



調理学実習室



栄養学実験室

I・IIコースのカリキュラム (1974年)

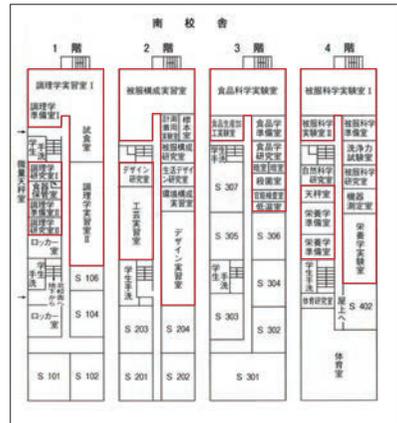
| Iコース               | IIコース                |
|--------------------|----------------------|
| 基礎化学               | 栄養学概論                |
| 基礎化学実験             | 食品学概論                |
| 栄養学 I II III       | 基礎調理 I II            |
| 栄養学実験 I II III     | 調理学実習 I II           |
| 栄養学演習              | 調理学演習                |
| 食品学 I II III       | 衣料学                  |
| 食品学実験 I II III     | 被服構成実習 I II III IV   |
| 食品学演習              | 被服構成論 I II           |
| 基礎調理 I II          | 被服構成論演習              |
| 調理学実習 I II         | 服飾美学                 |
| 調理学演習              | 基礎デザイン               |
| 被服材料学              | 生活デザイン実習 I II III IV |
| 被服材料学実験            | 環境構成論                |
| 被服整理学 I II III     | 環境構成論演習              |
| 被服整理学実験 I II III   | 色彩形態論                |
| 被服科学演習             | 色彩形態論演習              |
| 被服構成実習 I II III IV | 色彩学                  |
| 被服構成論演習            | 工芸                   |
| 美術 II              | 美術 I II              |

共通科目

- 生活デザイン
- 家庭管理学
- 家庭経済学
- 住居学
- 統計学
- 家庭機械及家庭電気
- 育児学
- 看護学
- 学校保健
- 生理学
- 商品学・流通論
- 簿記原理
- 消費者経済学演習

\* 演習4単位(家政学研究)はいずれか1つを選択必修  
\*\*太字は必修科目

校舎図面 1975年



### III コース制を廃止、新たなカリキュラムへ

1989年度には芸術学科が開設され、デザイン系教員の移籍や実習室の移管などもあり、I・IIコース各80名の定員としました。

しかし28年間続いたコース制は、学生にとっては理解しにくい部分も多く、94年度にはコース制を撤廃し、「生活と環境」「生活と文化」「生活と社会システム」の3系列の選択科目から履修するカリキュラムに変更しました。必修科目として「生活論演習」「生活実験実習」といった少人数で基礎的学習ができるような共通科目を置き、「家政学研究」でテーマを絞ってより深く考究できるように配慮しています。

家政学科は、総合科学である家政学を学び、社会変化にも対応できる問題解決型のカリキュラムを特色としています。快適で人間性豊かな生活とはどうあるべきか、健康で健全であることは、個人にも社会にも求められています。それには単に生活技術にとどまらず、精神的、文化的に探究することが必要です。家政学科では、自分の考える視点で学び、生活者としての新たな価値観と知識を身につけ、生涯設計を行い実践していく能力を高めていくことを目指すこと、これがその教育方針なのです。



1995年



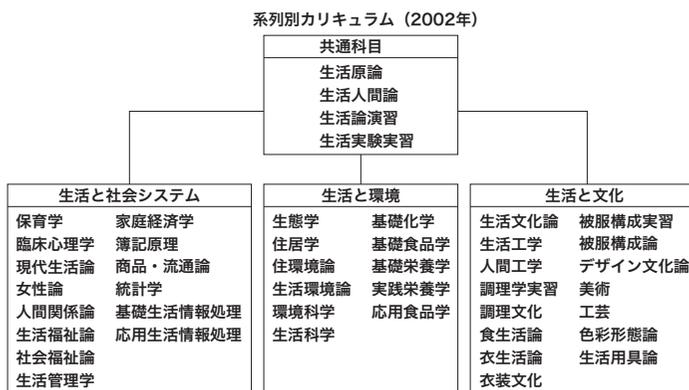
1998年



1999年



2000年



\*家政学研究 (ゼミナール) 必修は1科目を選択

※展覧会では vol.2 から児童教育・子ども、教養、芸術、現代教養学科のパネルもあわせて展示

## II 特色ある教育

### 一般教育（共通教育）科目の変遷

宮田 雅智（青山学院女子短期大学名誉教授）

#### ◆開学当初から「教養教育」を重視

設置基準の最低条件を超える一般教養科目（1952年10月の学則改正で「一般教育科目」と名称変更）を配置。詳細な履修規定に関しては1953年度の学則で明文化。

開学時の短期大学設置基準と本学学則

|        |       | 設置基準   |       | 本学学則   |       |
|--------|-------|--------|-------|--------|-------|
|        |       | 卒業要件単位 | 設置科目数 | 卒業要件単位 | 設置科目数 |
| 一般教育科目 | 基督教学  | —      | —     | 4      | 2     |
|        | 人文系   |        | 2科目以上 | 8単位以上  | 9     |
|        | 社会科学系 |        | 2科目以上 | 4単位以上  | 6     |
|        | 自然科学系 |        | 2科目以上 | 4単位以上  | 5     |
|        | 外国語科目 | —      | —     | 4      | 3     |
|        | 合計    | 20単位以上 |       | (*)    |       |
| 体育     | 講義    | 2単位以上  |       | 1      | 1     |
|        | 実技    |        |       | 1      | 1     |

(注) この表は認可申請書等の記述を基に新規に作成した。

(\*) 学則には合計の記述はないが、計算すると「24単位以上」

#### 追記

##### 【一般教育科目】

家政学科は「物理」「化学」必修

##### 【外国語科目】

文科国文専攻・家政科：英語、仏語、独語から1科目選択必修

文科英文専攻：仏語、独語から1科目選択必修

(六十五年史 通史編P57～P58参照)

#### ◆一般教育科目の改革

1991年に設置基準の大綱化があり、多くの大学、短期大学で一般教育を廃止。本学では「一般教養の重視」を堅持することを大学の意志として確認。全学的検討と協力を得ながら、さらなる充実を目指し「一般教育科目の改革」を実施。

- 改革の特徴
- (1) 科目履修上の選択幅の拡大
  - (2) 学科を越えた教育・学習の体制
  - (3) 半期制の導入

共通教育科目を「キリスト教学」「主題科目」「外国語科目」「健康教育科目」に再編

主題科目（1998年度から実施）

人文、社会科学、自然科学、総合科目、創作・表現の5系列に分類。総合科目以外は半期2単位。

「人文・社会・自然」の3系列は各2単位必修。

他学科専門科目（1998年度から実施）

各学科の専門教育科目の中から、他学科の学生に履修を認めるものを指定し、主題科目の第6系列として配置。

任意に選択した授業科目（卒業要件上の分類、1998年度から実施）

共通教育科目・専門教育科目等、区分ごとに定められた卒業要件単位数を超えて履修した科目の単位を「任意に選択した授業科目」という区分の卒業要件単位数に算入。

(注) 1954～1977年までの間、上記「任意に選択した授業科目」と同様に、一般教育科目、外国語科目、専門科目のそれぞれの卒業要件単位数を定めただけで、さらに「一般教育科目、外国語科目、専門科目のうちより選択して10単位以上取得」が卒業要件に組み込まれていた。(六十五年史 資料編 P812)

外国語科目（1999年度から実施）

「共通英語」、「選択必修外国語」各2単位を必修。外国語アワーの設置

健康教育科目（1999年度に一部実施、2000年度から全面实施）

「健康科学」「体育実技」半期各1単位必修。健康科学は前後期各7コマ、体育実技は「バドミントン」「エアロビクス」「日本の踊り」等、およそ20種目、前後期各24コマ、集中講義3コマ  
(六十五年史 通史編 P249-P254 参照)

### ◆現代教養学科における一般教養の学び

2012年度にスタートした現代教養学科では、改組前開講されていた共通教育科目の多くを現代教養学科コア科目、共通教育科目、各専攻専門科目に移行。かつ各専攻においては、他専攻の専門科目履修を可能にすることにより、従来の幅広い一般教養的な学びを維持した。

(六十五年史 通史編 P361-P366 参照)

#### 授業風景



一般教養科目「化学」1952年



一般教育科目「数学」1961年



一般教育科目「体育科目 実技」



一般教育科目「書道」1985年



一般教育科目「保健体育」1986年



共通教育科目「教育学」1999年



共通教育科目「キリスト教学」2000年



共通教育科目「基礎情報処理」2003年



共通教育科目「キリスト教学実践A」2018年

# 一般教育（共通教育）科目の変遷

宮田 雅智（青山学院女子短期大学名誉教授）

|                    | 開学当初<br>1950年度 | 改革前<br>1996年度 | 改革後<br>2000年度                |
|--------------------|----------------|---------------|------------------------------|
| キリスト教学             | キリスト教学Ⅰ・Ⅱ      | キリスト教学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ   | キリスト教学Ⅰ・Ⅱ<br>キリスト教学Ⅲ・Ⅳ       |
| 人文関係科目             | 哲学             | 哲学            | 哲学Ⅰ・Ⅱ                        |
|                    | 文学論            | 文学            | 日本文学Ⅰ～Ⅲ                      |
|                    | 国文学            | 漢文学           | →創作・表現へ移動                    |
|                    | 漢文学            | 国語表現法         | →創作・表現へ移動                    |
|                    | 音楽             | 音楽            | 芸術Ⅰ・Ⅱ                        |
|                    | 美術史            | 美術            | →創作・表現へ移動                    |
|                    | 書道             | 書道            | 倫理学Ⅰ・Ⅱ                       |
|                    |                | 倫理学           | 日本史Ⅰ・Ⅱ                       |
|                    |                | 歴史            | 東洋史Ⅰ・Ⅱ                       |
|                    |                | 生活デザイン        | 西洋史Ⅰ・Ⅱ                       |
| 社会科学関係科目           | 法学             | 法学            | 生活デザインⅠ・Ⅱ                    |
|                    | 経済学            | 経済学           | 英米文学Ⅰ・Ⅱ                      |
|                    | 心理学            | 心理学           | アメリカ文学Ⅰ・Ⅱ                    |
|                    | 世界史            | →人文関係科目へ移動    | 対照言語学                        |
|                    | 教育学            | 教育学           | 社会言語学                        |
|                    | 商業学            | 政治学           | 日本思想史Ⅰ・Ⅱ                     |
|                    |                | 国際関係論         | 手話Ⅰ・Ⅱ(2009年度～)               |
|                    |                | 社会学           | Japanese CultureⅠ・Ⅱ(2009年度～) |
|                    |                | 社会思想史         | 法学Ⅰ・Ⅱ                        |
|                    |                | 人文地理学         | 経済学Ⅰ～Ⅳ                       |
| 自然科学関係科目           | 物理学(家政学科必修)    | 物理学           | 心理学Ⅰ～Ⅷ                       |
|                    | 化学(家政学科必修)     | 化学            | 教育学Ⅰ・Ⅱ                       |
|                    | 生物学            | 生物学           | 政治学Ⅰ・Ⅱ                       |
|                    | 生理学            | 生活科学          | 社会学Ⅰ・Ⅱ                       |
|                    | 生活科学           | 自然科学概論        | 社会思想史Ⅰ・Ⅱ                     |
|                    |                | 統計学           | 人文地理学Ⅰ・Ⅱ                     |
|                    |                | 数学            | マス・コミュニケーション論Ⅰ～Ⅲ             |
|                    |                | 環境科学          | →自然科学関係へ移動                   |
|                    |                | 地理学           | 文化人類学Ⅰ・Ⅱ                     |
|                    |                |               | 経営学Ⅰ・Ⅱ                       |
| 創作・表現科目            |                |               | 女性学Ⅰ～Ⅳ                       |
|                    |                |               | 幼児教育                         |
| 総合科目               |                |               | 社会福祉概論                       |
|                    |                |               | 国際協力Ⅰ・Ⅱ(2007年度から)            |
| 指定他学科専門科目          |                |               | キャリア・デザインⅠ・Ⅱ(2010年度から)       |
|                    |                |               | 化学Ⅰ・Ⅱ                        |
| 外国語科目              | 英語Ⅰ・Ⅱ          | 英語Ⅰ～Ⅵ         | 生物学Ⅰ・Ⅱ                       |
|                    | フランス語Ⅰ・Ⅱ       | フランス語Ⅰ～Ⅴ      | 生理学Ⅰ・Ⅱ                       |
|                    | ドイツ語Ⅰ・Ⅱ        | ドイツ語Ⅰ・Ⅱ       | 生活科学Ⅰ～Ⅳ                      |
|                    |                | ロシア語Ⅰ・Ⅱ       | 自然科学概論Ⅰ～Ⅷ                    |
|                    |                | 中国語Ⅰ・Ⅱ        | 統計学Ⅰ・Ⅱ                       |
| 日本語科目              |                |               | 数学Ⅰ・Ⅱ                        |
|                    |                |               | 環境科学Ⅰ・Ⅱ                      |
| 保健体育科目<br>(健康教育科目) | 体育科目講義         | 保健体育Ⅰ・Ⅱ       | 地理学Ⅰ・Ⅱ                       |
|                    | 体育科目実技         |               | 情報科学Ⅰ・Ⅱ                      |
|                    |                |               | 基礎情報処理                       |
|                    |                |               | 応用情報処理                       |
|                    |                |               | 書道Ⅰ・Ⅱ(2007年度以降、人文関係科目へ)      |
|                    |                |               | 創作俳句Ⅰ・Ⅱ(2007年度以降、人文関係科目へ)    |
|                    |                |               | 音楽Ⅰ・Ⅱ(2007年度以降、人文関係科目へ)      |
|                    |                |               | 国語表現法Ⅰ・Ⅱ(2007年度以降、人文関係科目へ)   |
|                    |                |               | 論文作法                         |
|                    |                |               | 総合科目Ⅰ～Ⅳ                      |
|                    |                |               | 29科目(国文、英文、家政、教養、子ども、芸術各学科)  |
|                    |                |               | 英語Ⅰ～Ⅳ                        |
|                    |                |               | 共通英語                         |
|                    |                |               | フランス語Ⅰ～Ⅴ                     |
|                    |                |               | ドイツ語Ⅰ・Ⅱ                      |
|                    |                |               | ロシア語Ⅰ・Ⅱ                      |
|                    |                |               | 中国語Ⅰ・Ⅱ                       |
|                    |                |               | スペイン語Ⅰ・Ⅱ                     |
|                    |                |               | 韓国語Ⅰ・Ⅱ                       |
|                    |                |               | 日本語Ⅰ・Ⅱ                       |
|                    |                |               | 健康科学Ⅰ～Ⅴ                      |
|                    |                |               | 体育実技Ⅰ～Ⅲ(注)種目別、およそ20種目        |

2000年度開講科目名の色分けは、改組後の現代教養学科での開講分野を意味している。改組前後で同一科目名(類似)を基準に色分けした。加えて、内容を引き継いだうえで、新しい科目名として配置したものもあるので、シラバスを確認して対応付けた。

現代教養コア科目 共通教育科目 日本専攻専門科目 国際専攻専門科目 人間社会専攻専門科目

黒字科目は開講されていない。ただし、「音楽」「ロシア語」「スペイン語」は大学との単位互換対象の科目として履修できる。

## II 特色ある教育

### 共通教育の外国語科目

黒岩 裕 (青山学院大学コミュニティ人間科学部 教授)

共通教育の外国語科目は大きく分けて、英語科目と第二外国語科目に二分できます。英語科目、第二外国語科目ともに、内容が多様で充実している点に大きな特徴があります。英語科目は 1 年次必修の「共通英語」、1 年次選択必修の「応用英語」、さらに自由選択の英語科目が用意されています。第二外国語は、フランス語、中国語、韓国語、ドイツ語のそれぞれについて、1 年次選択必修の I/II と 2 年次または 3 年次に履修する自由選択の III/IV が用意されています。以下それぞれについて具体的に紹介したいと思います。

#### 1. 英語科目

##### (1) 共通英語

共通英語は、現代教養学科国際専攻（2012年の改組前は英文学科）以外の学科・専攻の学生が 1 年次に必修科目として履修します。共通英語は学生の多様な興味・関心や英語力に対応し、学習意欲を喚起する目的で、以下の通り、A から G まで幅広い科目を用意しました。新入生は入学前のアンケートで希望する共通英語科目を選択します。また共通英語はあらかじめ設定された語学アワー（木曜日 1 時限目と 2 時限目）に開講されます。

共通英語 A : Reading (正確で深い英文読解能力を養成する。)

共通英語 B : Media English (英字新聞や英語ニュースを教材として深く世界を理解する。)

共通英語 C : Oral Communication (現代社会で必要な基本的な英会話能力を習得する。)

共通英語 D : TOEIC (TOEIC テストの受験準備を行う。)

共通英語 E : Children's Storybooks (英語の児童書・絵本を題材にして、英語の 4 技能を習得する。)

共通英語 F : English Movies (映画を使ってリスニング能力を養い、英語の会話表現や英語圏文化について学ぶ。)

共通英語 G : Basic English Grammar (英文法の基本を学びなおす。)

##### (2) 応用英語

応用英語は現代教養学科国際専攻（または英文学科）以外の学生の 1 年次選択必修科目です。応用英語の代わりに第二外国語のどれかを選択することも可能で、新入生は入学前のアンケートでどちらかを選択します。応用英語は以下の A から D の 4 科目が用意されています。

応用英語 A : Japanese Culture (英語で日本文化を理解し、紹介する。)

応用英語 B : American Culture (英語でアメリカ文化を理解する。)

応用英語 C : Presentation (英語で発表する能力を養成する。)

応用英語 D : English through Drama (劇や skit を通して英語の表現能力を養う。)

応用英語は後述の第二外国語と同じく、月曜日 4 時限目と 5 時限目に設定された語学アワーに開講されます。

### (3) 自由選択英語科目

更に英語を学びたいという意欲のある学生のために、自由選択英語科目として TOEIC I/II と Communication Skills I/II の2科目を提供しました。これらの2科目は現代教養学科国際専攻の学生も履修可能です。

### 2. 第二外国語

第二外国語は国際専攻（または英文学科）を含めたすべての学科・専攻の学生が履修することが可能で、入学前のアンケートで以下の4つの外国語の中から選択します。

フランス語 I/II 中国語 I/II

韓国語 I/II ドイツ語 I/II

編入の条件を満たすため本学在学中に第二外国語を4単位履修する必要がある学生、編入に関係なくさらに語学力を高めたい学生のため、それぞれの外国語について III/IV の中級クラスも用意しました。短大改組前には、これら4つに加えてスペイン語とロシア語が教えられていたこともありました。

以上が共通教育における外国語科目の概要ですが、最初に述べた通り本学共通教育の外国語教育は内容が豊富で多岐にわたるという特徴があります。このようにバラエティ豊かな外国語教育を受けられた学生は幸運だったと思います。コミュニティ人間科学部に移籍した現在、短大時代の外国語教育を振り返ると改めてそのことを実感する次第です。

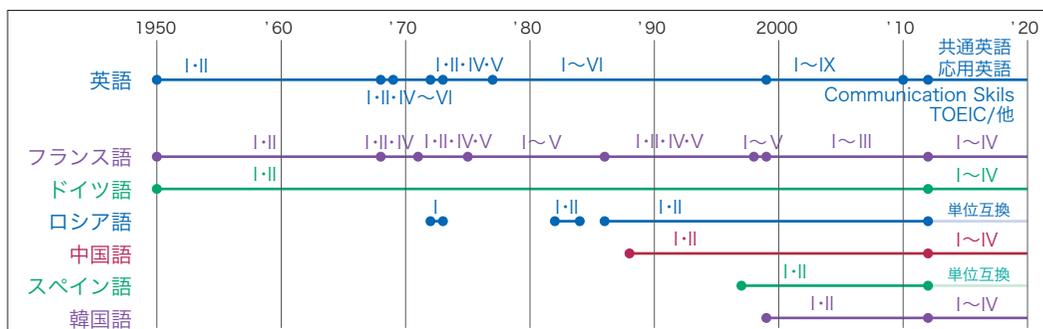


Communication Skills の授業



フランス語の授業 1998年

外国語科目・カリキュラムの変遷 『青山学院女子短期大学六十五年史 資料編』参照



## II 特色ある教育

### 健康教育「特色ある大学教育支援プログラム」

森下 春枝 (青山学院女子短期大学名誉教授)

平成 19 年度から平成 21 年度、文部科学省による「特色ある大学教育支援プログラム」補助事業に、本学の「健康教育授業を軸とした健康支援」が採択されました。この採択は、本学のこれまでの歩みを振り返ってみますと、開学当初からさまざまな取り組んできたことが認められたということが出来ます。

本学では、教養教育の一環として正課の体育授業および正課外の体育活動を充実させ、体力・気力にあふれた女性の育成や生涯スポーツの素地を育ててきました。1980年3月には、念願の短大専用の体育館が竣工し、授業以外の体育系の課外活動もこれまでも増して活発に行われてきました。1991年(平成3年)、設置基準が大綱化され、これを受けて本学でもカリキュラム改革に取り組み、従来の保健体育科目を健康教育科目と改め、2000年度から新しいカリキュラムに移行しました。改革にあたって課題となったのは、実技に偏りがちである保健体育科目をどう再編するかということでした。

再編した具体的な内容は、「健康教育科目」を全学必修の共通教育科目とし、卒業に必要な単位数を2単位としました。科目は、健康科学(講義科目)と体育実技を配置しました(各1単位)。「健康科学」は半期1単位として複数科目を配置し1科目を選択必修としました。「体育実技」は半期1単位として複数科目を配置し1科目を選択必修としました。種目別の選択制とし人数制限科目としました。

さらに、健康教育カリキュラムの効果を高めるために、「健康支援プログラム」と「課外活動プログラム」を組織し、相互の結合を図りました。実際には2つのプログラムの多くは、長い歴史を持っており学生生活や教職員の生活に溶け込んでいましたが、改めて総合的なプログラムとして再編成しました。これら再編成の目的は、健康教育授業を軸に2つのプログラムと連携することで、体力向上・健康増進・意識改革のための支援事業活動を体系的に進めるとともに、学校生活のさまざまな機会を通じてスポーツ活動を楽しみ、運動



第3回青山学院大木杯スポーツ交歓会 1983年(体育館)短期大学の体育系クラブと高等部クラブの交歓試合



「体育実技」授業風景 2000年



秋期プレイデイ 1982年



春期プレイデイ 2014年

プレイデイ:1951年に始まり、2018年まで継続した行事。体育館建設を受け、1980年からは春と秋の2回開催された。秋期は2009年から学友会主催となり、2012年まで続いた。大学主催の春期も学友会委員、体連(体育団体連合会)委員の学生たちが運営に参加した。

習慣の基礎を培い、さらに生涯スポーツの素地を形成することにあります。

以上の取り組みが認められての採択でしたが、特筆される成果は設備やプログラムの内容の一層の充実は勿論ですが、学生のモチベーションの喚起にも有効だったことです。「体育実技」では、授業中に実施した授業評価からも好きなスポーツ、やってみたいスポーツを楽しんだことがわかります。「健康科学」では、自らの関心に沿った内容が選択できます。教員側からも、体力や興味・関心に応じた授業計画や専門性の高い指導が可能になったと評価されました。

「健康支援プログラム」では、新体力テストの結果を健康アドバイスとともに各個人にフィードバックでき、骨密度や体組成の測定なども可能になりました。「課外活動プログラム」では、プレイデイをはじめとする学生教職員ともにスポーツを楽しみ、各種セミナーの開催は生涯スポーツへの素地を培う機会にもなりました。

事業の一つとして2009年10月31日、「健康教育フォーラム 若い世代の心身の健康を考える」を開催し、第1部「実技発表とクラブ紹介」(中庭)、第2部「成果報告と特別講演会」(L301 教室)、第3部「身体の健康を科学する」(体育館にて様々な測定体験)というプログラムで本学の取り組みの発表を行いました。(展示資料参照)

おわりに、現代社会において、若い時の健康教育を積極的に推進していくことは極めて重要であると、本学の取り組みに対して「健康教育フォーラム」の講演でも専門家から評価に値すると言葉をいただきました。本事業は、当時、一般教育科目主任だった清水康幸先生はじめ、宮田雅智先生や当時の一般教育科目の先生方と一丸となって取り組み、採択からの3年間の補助事業は終了しました。この取り組み全体について平成22年3月に報告書を作成しています。ご覧いただければ幸いです。本学での取り組みが学生たちの生涯の糧となってくれたら嬉しいかぎりです。



「体育実技・エアロビクス」授業風景



「健康教育フォーラム 若い世代の心身の健康を考える」ポスター 2009年



「平成21年度 大学教育改革プログラム合同フォーラム」文部科学省主催/東京ビッグサイト2010年2月ポスターセッションにおける本学ブース

# 健康教育「特色ある大学教育支援プログラム」資料

「健康教育フォーラム 若い世代の心身の健康を考える」成果報告スライドより抜粋 森下 春枝 (青山学院女子短期大学名誉教授)

|   |  |  |   |
|---|--|--|---|
| <h3>健康教育授業を軸とした健康支援</h3> <p>青山学院女子短期大学<br/>一般教育科目</p> <p>特色ある大学教育プログラム<br/>健康教育フォーラム<br/>2009年10月31日(土)</p>   | <h3>背景</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>●学生の体力低下</li> <li>●全期平均を下回る</li> <li>●備前大会、半部は記録更新の要改善</li> <li>●運動時間の減少</li> <li>●体育の時間以外の運動なし</li> <li>●運動する場所やチャンスの減少</li> <li>●当時の「保健体育科目」の問題点</li> <li>●クラス単位で登録、人数多い(50~60名)</li> <li>●科目少なく、健康の意識低</li> <li>●学生のニーズが満たされていない</li> </ul> <p>健康・体力増進体制</p> | <h3>概要</h3> <p>教育方針・目標<br/>キリスト教教育、女子教育、職業教育</p> <p>健康への意識の醸成、体力不足、運動機会不足、運動への意識の醸成</p> <p>健康づくりの推進、運動環境の整備、生涯スポーツ</p> <p>健康づくり推進委員会、保健体育研究部、学生課、学生課、学生課</p> <p>健康づくり推進委員会、保健体育研究部、学生課、学生課、学生課</p>   | <h3>健康教育科目(2000年度より改訂実施)</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>●健康科学(半期1単位:理論科目) 全学必修</li> <li>●体育実技(半期1単位:実技科目)</li> <li>●学生は、興味のある科目・項目を選択</li> </ul> <p>健康科学(1~Vの科目)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●合計16コマ設定</li> <li>●1:基礎理論:24コマ</li> <li>●2:健康測定:24コマ</li> <li>●3:健康増進:24コマ</li> <li>●4:健康と社会:24コマ</li> <li>●5:健康と心:24コマ</li> <li>●6:健康と生活:24コマ</li> <li>●7:健康と環境:24コマ</li> <li>●8:健康と文化:24コマ</li> <li>●9:健康と国際:24コマ</li> <li>●10:健康と未来:24コマ</li> <li>●11:健康と歴史:24コマ</li> <li>●12:健康と芸術:24コマ</li> <li>●13:健康と科学:24コマ</li> <li>●14:健康と哲学:24コマ</li> <li>●15:健康と倫理:24コマ</li> <li>●16:健康と宗教:24コマ</li> </ul> <p>体育実技(16科目)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●合計16コマ設定</li> <li>●1:基礎理論:24コマ</li> <li>●2:健康測定:24コマ</li> <li>●3:健康増進:24コマ</li> <li>●4:健康と社会:24コマ</li> <li>●5:健康と心:24コマ</li> <li>●6:健康と生活:24コマ</li> <li>●7:健康と環境:24コマ</li> <li>●8:健康と文化:24コマ</li> <li>●9:健康と国際:24コマ</li> <li>●10:健康と未来:24コマ</li> <li>●11:健康と歴史:24コマ</li> <li>●12:健康と芸術:24コマ</li> <li>●13:健康と科学:24コマ</li> <li>●14:健康と哲学:24コマ</li> <li>●15:健康と倫理:24コマ</li> <li>●16:健康と宗教:24コマ</li> </ul> |
| <h3>健康科学 I ~ V (前期・後期)</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>●健康科学 I : 生命の科学・健康医学</li> <li>●健康科学 II : ライフステージの健康と運動</li> <li>●健康科学 III : スポーツと健康</li> <li>●健康科学 IV : 健康と運動</li> <li>●健康科学 V : 心の健康</li> </ul>   | <h3>体育実技 I、II (ダンス種目)</h3>   | <h3>体育実技 I、II (スポーツ種目)</h3>  | <h3>体育実技 III (ゴルフ、スキー、テニス)</h3>   |
| <h3>健康科学授業での測定</h3>   | <h3>健康教育科目の改革に伴う取組</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>●講義・実技ともに多様化</li> <li>●教育活動の統一性・公平性が求められる</li> <li>●テキストの作成</li> <li>●専任・非常勤教員合同で分担執筆</li> <li>●2000年に執筆</li> <li>●2003年に改訂版</li> <li>●2007年ワークブック形式に改訂</li> </ul>  | <h3>健康支援プログラム</h3> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 体力健康増進支援             <ul style="list-style-type: none"> <li>a. 体力診断テスト(新体力テスト) ← 45年継続</li> <li>b. 体脂肪測定 ← 1996年から継続実施</li> <li>c. 骨密度測定 ← 2004年から実施</li> </ul> </li> <li>② 保健室との連携             <ul style="list-style-type: none"> <li>●健康診断</li> <li>●健康増進・啓発活動</li> </ul> </li> <li>③ 教育環境整備             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 他に授業の為ではなく、学生、教職員、卒業生に開かれた場として</li> </ul> </li> </ol>      | <h3>課外活動プログラム</h3> <ol style="list-style-type: none"> <li>① プレィディ(詳細は後述)</li> <li>② セミナー             <ul style="list-style-type: none"> <li>a. ボウリング → 2004年開始 (2003年度より継続実施)</li> <li>b. ウォーキングセミナー → 2005年開始</li> <li>c. ヨガ → 本年度より開始</li> </ul> </li> <li>③ クラブ活動             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 日常運動: 大倉(各スポーツ種目クラブ)</li> <li>● 文化部: クラスメイトクラブの発表、定期発表(ダンス部)</li> <li>● 同窓会活動                     <ul style="list-style-type: none"> <li>● 情報交流(後援発行)、ダンス部の活動(後援)</li> <li>● 交流試合(同窓会(テニス部、バレーボール部))</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>④ 同窓会活動</li> </ol>  |
| <h3>プレィディ (1980年以降実施)</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 全学的スポーツ行事(学生・教職員交流)</li> <li>● 参加者: 100チーム、40名程度...自由参加</li> <li>● 参加の基礎(自由参加)</li> <li>● 種目: バドミントン/バスケ/ソフトボール、バレーボール/卓球/マニカ/ボウリング</li> <li>● 運営             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 体育研究部(役員・選手)、学生部長、学生課職員、学友会委員(学生)、体育委員会(学生)</li> <li>● ホスター、組み合わせ、会場設置は各クラブが担当・運営</li> </ul> </li> </ul>                     | <h3>第56回秋期プレィディ</h3>   | <h3>第56回秋期プレィディ</h3>   | <h3>取り組みの特性 ①②</h3> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 学生のモチベーションを大切に             <ul style="list-style-type: none"> <li>● やらされるのではなく、やりたいものを選択</li> <li>● 運動やスポーツを楽しむ、健康意識の向上</li> </ul> </li> <li>② 健康教育科目と健康支援プログラム、課外活動プログラムの連携 → 相乗効果             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 体育実技の授業が、プレィディやクラブ活動に反映(成果を確立、新しいクラブ発足)</li> <li>● 健康科学の授業で、体力テストや各種測定の結果の活用</li> </ul> </li> </ol>   |
| <h3>取り組みの特性 ③④</h3> <ol style="list-style-type: none"> <li>③ 学生の社会的な需要に大きな効果             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 学料を越えた学生同士のコミュニケーションの醸成</li> <li>● 学生が自覚から運営まで行うプレィディ、主体性・リーダーシップの効果</li> </ul> </li> <li>④ 健康科学と体育実技の必修維持、健康支援とスポーツ行事の重視             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 健康を維持しスポーツを楽しむことは、現代人の「食生活」</li> <li>● 学生の現状 ⇒ 大学として取り組むべき現代的課題</li> </ul> </li> </ol> | <h3>組織・運営体制</h3>   | <h3>FD・運営支援など</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 健康教育科目             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 授業評価(全学共通)</li> <li>● 授業アンケート(体育実技)</li> </ul> </li> <li>● 健康支援プログラム             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 体力診断テスト</li> <li>● 体脂肪測定</li> <li>● 骨密度測定</li> </ul> </li> <li>● 課外活動プログラム             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 参加者アンケート</li> </ul> </li> </ul> <p>FD 相談科目検討</p> <p>学生に通知 連携改革実施</p> <p>検討・包括 内容検討改善</p> | <h3>運動不足の改善 (2006年度)</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 現在あなたは運動不足を感じますか?</li> <li>● 「⑤」非常に運動不足が少</li> <li>● 「①②」から運動不足ではない増加</li> </ul>   |
| <h3>運動機会の増加 (2006年度)</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 現在あなたは運動やスポーツをどのくらい行っていますか?</li> <li>● 「①」ほとんど運動しないが大幅に減少</li> <li>● 「②④」から運動の機会の増加</li> </ul>   | <h3>運動に関する意識の変化 (2006年度)</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 生理に合わせ運動やスポーツを楽しみたいと思いませんか?</li> <li>● 「①」好きな運動を行いたい」が大幅に増加</li> <li>● 「③」あまり考えない」が減少</li> </ul>  | <h3>まとめ</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 以前の「保健体育科目」を全面的に改定し、学生が主体的に科目・項目を選択できる「健康教育科目」を設置</li> <li>● 伝統的に行われていた体力測定やプレィディなどを「健康支援プログラム」「課外活動プログラム」の枠組みに置き、それらのプログラムを拡充</li> <li>● 各取り組みの連携・相乗効果</li> <li>● 学生の身体・運動に対する意識の改善、運動習慣の向上などが実現できた</li> </ul>  | <h3>今後の実施計画</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>● いろいろの改善と充実化             <ul style="list-style-type: none"> <li>● カリキュラム: 科目の充実化</li> <li>● 課外活動: セミナー・プレィディの改善・充実化</li> </ul> </li> <li>● 施設・設備の拡充・整備             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 各取り組みを充実させるための基礎整備</li> </ul> </li> <li>● 健康支援プログラム体制の整備             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 各種測定の一元管理、設備・通知体制の整備</li> <li>● さらなる健康支援サポート</li> </ul> </li> </ul>  |
| <h3>ウォーキングセミナー(2006年度)</h3> <p>申し込み人数</p> <p>感想</p>   | <h3>課外活動プログラム(キョーキャン)2007</h3>   | <h3>青山祭(授業参加)</h3>   | <h3>リーダーズキャンプの様子</h3> <p>リーダー養成プログラムでゲームに負らずに参加</p> <p>熱心に討論</p>  |

## II 特色ある教育

### ライフ・キャリア・デザイン

宇田 美江（現代教養学科人間社会専攻 准教授）

2012年度の現代教養学科への改組を契機として、本学では独自のキャリア教育を展開してきた。そのキャリア教育は、正規のキャリア科目と課外でのキャリア支援の大きく2つに分けられる。

正規科目としてのキャリア科目は2012年度以前にも存在していたが（※）、現代教養学科がスタートした2012年度より本格的に「ライフ・キャリア・デザイン（当初の名称はキャリア・ライフ・デザイン）」科目群として、入学から卒業まで段階的なキャリア発達を促すことを目的とし導入した。

この科目群の中の「ライフ・キャリア・デザインⅠ」は、現代教養学科の全学生対象の必修科目とし、就職という社会の入り口だけでなく、長い人生における生き方・働き方を考える内容となっている。また、対象が女子学生のみであることから、新しい女性の生き方として、性別役割分業の変化や女性労働に関する内容も盛り込んでいる。開講当初は1年生の後期に設定されていたが、短期大学入学後なるべく早い段階で人生における生き方・働き方を考えて欲しいという意図で、2014年度より1年生の前期の履修に変更した。3年制の子ども学科においても、「ライフ・キャリア・デザインⅠ」は必修科目として2年生の後期に設定している。

他にも、選択科目として、企業におけるキャリア形成を考える「ライフ・キャリア・デザインⅡ」、企業研究・業界研究・職種研究を行う「ライフ・キャリア・デザインⅢ-A」、チームビルディングやプレゼンテーションの実践を行う「ライフ・キャリア・デザインⅢ-B」があり、段階的に職業観を醸成し、キャリア発達を促すことを目的としている。

（※）共通教育科目「キャリア・デザインⅠ」「キャリア・デザインⅡ」（2010・2011年度）



「LCDⅠ」授業風景

■ 共通教育科目（2012年度～） “現代を賢明に、豊かに生きるための基礎を築く”という観点から5つの科目群を配置

|                        |    | 1年前期          | 1年後期    | 2・3年前期 | 2・3年後期       |
|------------------------|----|---------------|---------|--------|--------------|
| キリスト教学                 |    |               |         |        |              |
| ライフ・キャリア・デザイン (LCD) 科目 | 必修 | LCDⅠ (現代教養学科) |         |        | LCDⅠ (子ども学科) |
|                        | 選択 |               | LCDⅡ    |        | LCDⅡ         |
|                        |    |               | LCDⅢA・B |        | LCDⅢA・B      |
| 外国語科目                  |    |               |         |        |              |
| 情報科目                   |    |               |         |        |              |
| 健康科目                   |    |               |         |        |              |

※ライフ・キャリア・デザイン科目の配置は2014年度以降のもの。他の科目群については詳細省略

以上は正規のキャリア科目であるが、全学的なキャリア支援を推進するために、2013年4月には「キャリアサポートルーム」が南館2階に開室された。短大生の卒業後のキャリアは多様であることから、本室は、就職のみならず、編入学・留学といった多様な進路選択に対応するものであり、それぞれのコーナーが設置され、求人や企業情報だけでなく、編入学や留学の



キャリアサポートルーム



キャリアサポートルーム

情報も集約された。また、2013年度から2019年度までは専任のキャリアカウンセラー2名が常駐し、個別相談や面接練習の実施等、きめ細かくキャリア支援にあたってきた。

また、キャリアサポートルームは、開設当初には、学生課就職担当職員の窓口と分かれていたが、その後統合され、職員も常駐する部屋となった（従来の「就職担当職員」は広くキャリアを支援するという意味を込め「キャリア支援担当職員」へと改称された）。さらに学生のメンターである教員、学生相談室、保健室とも連携し、教職員が一丸となってキャリア支援にあたってきた。本室では、キャリア支援担当職員やキャリアカウンセラーが主体で行うセミナーだけでなく、さまざまな教員がその専門分野を生かし、学生のニーズに応じたセミナーも多く実施してきた。学生にとってキャリアについて気軽に相談できる場として年々利用者が増加し、たとえば2019年度の個別相談件数は1195件（内ハローワークの出張相談186件）であった。

なお、2020年度は、子ども学科の3年生、専攻科生等に対し、キャリア支援を継続して行っているが、本学の閉学に伴い、本室も2021年3月末で閉室することとなった。本学のキャリア教育に深く携わってきた者として、卒業生たちが本学のキャリア教育を糧にそれぞれ充実した人生を送り、社会の中で「地の塩・世の光」として広く活躍してくれることを願ってやまない。



教員による自己PRセミナー



面接対策セミナー

## II 特色ある教育

### 造形系教育の系譜

趙 慶姫（現代教養学科人間社会専攻 教授）

2012年度の改組にあたり、現代教養学科のカリキュラムを立案するのに合わせて、子ども学科も含めた全学的なカリキュラム再編成も行ない、2学科共通の「現代教養コア科目」が新設された。この科目群は従来の学問の専門領域ごとの区分とは異なるユニークな科目構成になっているが、その中の第Ⅲ群[表現]に設けられた3ジャンルの内、①<造形>は旧家政学科と旧芸術学科における造形系教育の系譜をもつ。

1989年に開設された芸術学科は、既存の美術大学、学部、学科とは異なり、理論と制作をバランスよく学ぶことを目標にユニークなカリキュラムを組んでおり、開設当初、就任した5名の専任教員の内3名が理論系、児童教育学科と家政学科に所属していた彫刻、デザインを専門とする教員各1名が制作系という教員組織だった。実技科目「構成」と「卒業研究(制作)」は兼任講師も加え、絵画・彫刻・デザイン・織(1997年まで染織)の4分野を設けていた(彫刻の卒業研究は2004年度まで)。その後、2名の制作系専任教員の分野は絵画とデザインになり、2000年からは5名の専任教員の内、制作系が絵画・デザイン・織の3名となった。

一方、家政学科は2コース制を導入した1967年からデザイン系の専任教員を擁し、「色彩形態論」「生活用具論」「デザイン文化論」といった造形・デザインに関する講義科目と「基礎デザイン」「工芸」「美術」などの実技科目を設け、芸術学科開設後は家政学科のデザイン系の専任教員が芸術学科の実技科目も担当した。

2010年度に芸術学科の絵画の教員が定年を迎え、すでに改組が決まっていたことから後任を補充せず、芸術・家政の両学科でデザインと織の分野を専門とする、合わせて3名の制作系教員が現代教養学科に移籍することになっていた。旧5学科の内、新学科の3専攻にそのカリキュラムが引き継がれることが明確な他の4学科に比べて、芸術学科はその教育をどう新学科に引き継ぐことができるのか、中でも制作系の教員にとって大きな課題となった。



家政学科 1975年頃



家政学科 1984年頃



芸術学科 1998年頃



芸術学展 2001年頃



芸術学科 2008年頃

そのような状況のもと、改組に向けて 2009 年 11 月に立ち上がった新学科設立準備委員会においてカリキュラムを検討していく中で、「自ら発信しコミュニケーションする」ために多様な表現を身につけることを目指す科目群「表現」を設け、その中の〈造形〉ジャンルに芸術学科、家政学科で行なってきた造形、デザイン教育を生かすことになった。

「芸術」ではなく「造形」としたのは二つの理由があった。一つはファインアートの専任教員がない以上「芸術」を名乗ることはできないという考え、もう一つは全ての学生を対象とする科目群として、このジャンルが目指す目標を、造形要素の基本を学び表現力を高める、としたことにある。「芸術」に至る以前の造形表現行為は人間の基本であるにも関わらず、「芸術」「美術」というと何か特殊なものと考えがちであるが、自然・人工、あらゆる造形物に囲まれている社会においては、造形の原理を学ぶことは言語を習得するのと同じように、社会生活を豊かに送るためにごく基本であることを学生に伝えたいという思いだった。

こうして、現代のコミュニケーションに重要な「視覚伝達力」を高めるために色、形、素材・質感という造形の基本的な三要素を学ぶ「ヴィジュアルコミュニケーション」を科目名とする演習科目 ABC が 3 名の制作系教員によって開講された。同様に 3 教員がそれぞれの専門分野で「造形ワークショップ」という実習科目を担当し、手を使うことで触覚を鍛える、能動性を身につける、表現力を養うといった、やはり造形行為の基本をふまえた授業を行なった。

また現代教養学科の卒業演習では造形系のゼミも開講し、卒業研究を論文ではなく制作とする選択肢も設けた。ここで旧芸術学科の 2 教員のゼミは「作品」を制作することを目標とし、旧家政学科の教員のゼミは「研究・考察」のプロセスと成果をまとめるという違いがあった。造形に関心がある学生の中にも、作品として表現したいという者もいれば、色や形といった造形要素そのものや、モノの構造、仕組みに興味を持ちそれを探求しようという者もいる。この二つのアプローチがあったことは現代教養学科の造形系教育が、教員も学生も少人数であったものの一元的ではなかった、それは家政学科の伝統と芸術学科の挑戦をベースにしたものであったからと言えるのではないだろうか。



造形ワークショップ A 2012 年



ヴィジュアルコミュニケーション演習 B 2018 年



現代教養コア科目【表現】展 2017 年



卒業演習発表会 ギャラリートーク 2016 年

## II 特色ある教育

### 児童教育学科・子ども学科の特徴としての芸術系の科目群 -1

久保 制一 (子ども学科 特任教授)

1962年に青山学院女子短期大学の4番目の学科として児童教育学科(後に児童教育学科→子ども学科)は創設された。1950年の短大開学の時から幼児教育系の学科を設置する構想を持っていたので、校舎増築と合わせて短大創立12年目に学科はスタートした。学科の出発点から他の短期大学などの保育系や幼児教育系学科とは一線を画する理想と理念を高くかかげていた。

学科の創設に尽力した一人である教育学の林三平教授の文章をいくつか抜粋してその理想と理念を再確認しておく。「私達は、学科開設にあたって、まず従前の『保育科』の方針と形態からの脱却を目指した。学科の名称を『児童教育学科』としたことも、新しい理念の下での新しい旗を掲げたことを意味する」「幼稚園教諭の養成、あるいは保育所保育(現保育士)の養成を主たる目的とする学科の多くは、従来は「保育科」の名称の下で設置されてきた。これらの学科の主要な目的は、幼稚園教諭、保育所保育の養成におかれており、他方で、卒業生を迎える幼稚園・保育所側の要求は、ピアノが弾け、折り紙が折れるといった、教育技術を身につけたすぐに役に立つ保育者の養成に比重が置かれる傾向があった。こうした状況の下で、既存の「保育科」の教育内容の編成は、おのずから、幼児向きとみられる保育内容の伝達と、その教育技術の訓練を軸として構成され、展開されることになる」「子どもの成長の糧になるような文化を追求し、自らの内にたくわえ、作り出すことのできる基礎的な力を育成すること、自らが人間的に成長するその土台を養うこと、これらのことが、子どもとかかわる仕事をする人にとって、何よりも重要されなければならないのではないか」(講座日本の学力 別巻1「大学教育」7章)

このような視座から構築された学科のカリキュラムは、教育学や心理学・福祉学などの基礎的でアカデミックな学問領域を主軸に、いわゆる音・図・体といわれた実技系の科目群は幼児向けの保育内容と方法論を細切れに伝授するのではなく、それぞれの芸術領域の専門性を深め感性を涵養することを重視した内容とした。卒業後に保育者として「即戦力」となるスキルの伝授ではなく、学生自身が感じ、考え、クリエイティブに新たなモノや関係性を作り出すことのできる基礎的な力を育成し、人間的に成長するその土台を養うことが、子どもとかかわる仕事をする人にとって、あらゆる場面に適応できる創造的な本物の力となると考えた。実際に卒業生たちの評価は極めて高く、幼児教育・保育の現場を支えている。

歴代の授業担当者やその時代、時期によってその展開は、多少のバラエティと改良はあるものの、幼児教育の現場ですぐに役に立つような保育技術の伝授といった内容ではなく、芸術の本質に根ざした人間の営みとしての表現の原点を探求することを常に目指すという点ではぶれることなく継承してきている。

それぞれの授業の主なねらいと内容をみていくことにする。

#### ■美術・造形系

美術系の授業は概ね、1年次では平面的造形表現、2年次では立体的な造形表現、3年次・専攻科ではその応用的表現の実技を主としたカリキュラムを継承し



図画工作 油絵 at 美術室

てきた。「図画工作」では油絵というかなり専門的であるが自由度の高い画材を用いて年間で4枚のキャンバスに油絵を描いてきた。入学後すぐにキャンパスにイーゼルをかかえて出て、学内風景を描くのかと思いきや何かひとつのステキだなと思えるオブジェを見つけ、それをキャンパスに大きく描くことから始め、乾いてしまえば全面的に描き換えることもできる油絵の特性を生かしたり、また絵の具を塗り重ねることで色の深みや輝きが出ることを発見したりする中で多くの学生がもつ美術への苦手意識を覆すことができた。

「造形表現（絵画製作）」は通称 木工とも呼ばれてきたように、木を素材に椅子・遊具・胸像・服・楽器など様々な形態をテーマにそれぞれが鋸や鑿をもち、切ったり彫ったりして作品を制作した。最近では前期は紙で大きな花、後期は木で魚というテーマで作品制作をしてきた。部分に気を配るといふ全面的な把握力・構成力の力量を高めることができた。

美術室と図工室は十分な広さと設備を持ち、画材や道具を整備して学生が常時使えるアトリエとしてきた。

### ■音楽・器楽系

音楽系の授業は、「音楽」ではともかく自分の身体から声を発して歌うことをベースに、季節のうた、わらべうた、賛美歌、現代の子どものうたなど幅広い選曲で歌う楽しさを体感するとともに、音楽理論やパーカッションの基本の修得も大切にしてきた。また「器楽」は1年次から3年次まで選択できるよう科目配置をしているので、入学時は初心者だった学生も卒業時には歌の伴奏ができるまでに上達できた。授業は個人レッスン方式でピアノ演奏を中心にしつつ、オルガン・アコーディオン・ギターなどの楽器を選択して修得できるようにした。練習曲もクラシック曲から現代音楽、子どもの歌の伴奏、ポピュラー音楽まで幅広い選曲がされて学生の希望も叶えつつ演奏技術の向上をサポートしてきた。防音を施した音楽室が2教室と少人数での個人レッスンができる学科専用の小さなピアノ室が16室あり、常時学生が空き時間には練習することができるよう整備してきた。



図画工作 油絵 at campus



造形表現 木工 at 図工室



音楽 歌 at 音楽室



器楽 ピアノ at 器楽室

## II 特色ある教育

### 児童教育学科・子ども学科の特徴としての芸術系の科目群 -2

久保 制一 (子ども学科 特任教授)

#### ■身体表現系

身体表現の領域は、はじめの頃は幼児体育と音楽リズムとしてであったが、より幅広く身体表現としての領域として捉え直し、2000年度から身体表現領域の専任教員を学科に迎えた。主に演劇・ダンス・パフォーマンス・インプロなどの総合的な身体表現の専門性をより深く内実化できることになった。と同時に学生自身の身体性の確立、こり固まったあたま・こころ・からだをほぐし柔軟でしなやかな身体を獲得できるような授業の展開を目指した。特に L402 は舞台と客席のある小劇場のような教室で、照明・音響機材が整備されている環境であり、これを活用してきた。また体育館のプレールームと合わせておもな授業展開のスタジオとしてきた。



身体表現 ワークショップ at プレールーム

#### ■コア科目「ワークショップ・人間と表現」

2006年度から子ども学科に改組して3年制のカリキュラムを構造化した。科目の多くは選択科目としたが、その中で学科の必修とした科目群が子ども学コア科目で、各学年に配置している。1年次前期の「ワークショップ・人間と表現」は、高校までの記憶を主とした受け身の学びから、自らが問いを発する主体的な学びへの転換のきっかけとなることを目指し、学生自身が学びの主体として大学での学問の方法を五感を駆使し、自身の身体と頭脳で向き合いこころを揺さぶるような様々なワークショップを通して鍛える内容とした。オムニバス形式で各分野の専門の講師によってワークショップを展開してきた。まずは、身体と感性の解放なくして学問や芸術、表現活動、ひいては子どもたちとの生活=保育の活動はないとの観点から、感じ考え作り上げる喜びを学生と共有できるワークショップのスタイルでの授業を作り上げた。また、表現を感受することのよろこびや楽しさを、自身の刻まれている幼少時からの記憶とともにたくさんこのころのゆさぶりと知の耕しができ、学生自身の知性と感性の再構築を促すことができた。

#### ■「特研」での卒業制作

「幼児教育特別研究」(C2)「児童教育特別研究」(CS)「子ども学特別研究」(C2-3)は学科必修の卒業研究の科目であり、1990年度までは研究成果をまとめる形式は論文のみであったが、卒業制作の形での取り組みが追認され、美術・演劇・音楽などの領域での様々な表現による卒制作品での創作・研究が行われるようになった。じっくり自分のテーマを見つけ出し創作をし、美術・造形作品や、作曲をし演奏をする、また美術・音楽。身体表現を総合化した映画・ミュージカルや演劇としての創作と



特研ゼミ 卒展 at 短大ギャラリー

研究をすすめひとつの作品として結実させる。その作品を「卒展」(短大ギャラリー)「作品発表会」(L402)で発表してきた。

2006年度からは3年制の子ども学科全員での論文発表も含めた「特研発表会」が開催されるようになった。子ども学科では1年次から「子ども学基礎論」「子ども学基礎演習」という少人数制のゼミナールがあり、2年次からの卒業研究のゼミでは、各自の研究テーマをその研究領域の指導教員のグループに属して、じっくり2年間かけて取り組み、その成果を卒業論文または卒業制作に結実させて発表。その年度の卒業論文と卒業制作の概要を記録したレジュメ集『児童教育研究』(2020年度は第58号)を発行してきた。

### ■大発表会

大発表会(のちに発表会)はステージと客席300席があるL402教室で、子ども学科の前身である児童教育学科の時代から引き継いで、半世紀を超える伝統の学科独自の行事である。発表内容は学生の自主的なチームや個人による創作で、演劇、人形劇、ミュージカル、ダンス、楽器演奏、合唱、独唱など多彩を極め、それぞれが工夫と稽古を重ねて真剣に発表をする。豊富に用意されている芸術・表現系授業での成果を中心に、総合化された表現による発表の場となっている。

この発表会の企画はすべて学生たちの手によるもので、責任者、受付、司会、照明、音響、アプローチディスプレイ、写真、プログラム制作、舞台設営、広報、渉外・ビデオ・写真撮影、会計などのスタッフは準備段階からミーティングを重ね開催準備の運営をしてきた。学生にとっては、すべてを学生達で作り出す企画力、コミュニケーション力を磨くことができ、その上で達成感を十分に感受することができている。

このように、学科の特徴としての多くの芸術・表現系の科目群を配置することで、芸術との日常的な触れ合いを豊かに持つことができ、おおらかな感性としなやかな知性のバランスのとれた女性として多くの学生たちが育ち、学舎を巣立っていった。



卒展 ギャラリートーク at 短大ギャラリー



大発表会 at L402



子ども学科発表会 at L402

## II 特色ある教育

### サービスマーケティング（課外活動から現代教養コア科目）

河見 誠（学長・現代教養学科日本専攻 教授）

21世紀に入り、本学は参加・体験型の「課外活動連続講座」（学生部主催）に取り組みました。2001年度、国連がボランティア国際年と定めたことを受けて、連続講座「ボランティア・スタディ」を立ち上げます。そこで行われた「アジア学院ワーク・キャンプ」は、「共に生きる」ことこそが私たちの学ぶべき根源的課題であり目標であることを教えてくれました。そこで2002年度からは、連続講座「共に生きる」とタイトル変更し、2003年度には三篇構成の講座へと進展していきます。すなわち、＜農業と国際協力篇＞（アジア学院ワークキャンプ）、＜自然体験篇＞（清里キープ自然学校牛飼い体験ワークキャンプ）、そして＜平和・環境篇＞（沖縄を学ぶ旅）。いずれも、寝食を共にして一緒に作業を行ったり出会いを経験するなかで、「共に生きる」とはどういうことか、語り合い、深めていくツアーとして、毎年継続されていくことになります。2010年度には＜アジア篇＞として海外スタディツアー「カンボジアを学ぶ旅」、さらに2011年度には宿泊を伴わない学内ワークショップ形式の＜国際協力プランナー入門＞が加えられ、多様なアプローチが揃います。

他方、やはり2001年度より、特別奨学金制度が、NGO等によるツアーや研修プログラムの参加支援へと拡充され、ACEF（アジアキリスト教基金）のバングラデシュ・スタディ・ツアーをはじめ、数多くのツアーへの学生参加をサポートしてきました。

2012年度の学科改組において、これらの課外活動は、新たに設けられた「現代教養コア科目」共生科目群の参加・体験型授業「共生社会実習」ABCDE及び「共生社会特別演習」へと結実します。そこには新たに「フィールドワーク子ども」（子ども学科との合併科目）が加わりました。またその後、信州共働学舎でのワークも入り、「共生」を学ぶ豊かな科目群として充実をみせていきます。これらのプログラムの多くは、学外のNGO・NPO等との連携・協力・協働によって成り立ってきたことを、感謝と共に述べておきます。

2017年度から、共生社会実習の一つとしてカンボジア・サービスマーケティング・ツアーが新設されました。これは、



アジア学院ワークキャンプ 2008年



清里キープ自然学校牛飼い体験ワークキャンプ 2008年頃



カンボジアを学ぶ旅 2011年



共生社会実習 C＜国際協力プランナー入門＞2014年



共生社会実習 A＜共働学舎 実習＞

## II 特色ある教育

### サービ斯拉ーニング（課外活動から現代教養コア科目）

河見 誠（学長・現代教養学科日本専攻 教授）

現地の人々のニーズに応える活動の企画実践を通して、サービス（仕えること）について具体的に学ぶプログラムの開発を試みたものです。

このように、試行錯誤のなかで、本学の参加・体験型学びは、ボランティア課外活動から「共生」を学ぶカリキュラムに結実し、サービ斯拉ーニングへと発展を遂げてきました。但し、ここで忘れてはならないのは、本学では、ずっと以前からスタディツアーやボランティア活動がなされてきていたということです。既に1990年には宗教活動委員会により、沖縄キリスト教短大との交流を伴う「沖縄セミナー」が行われています。ACEF バングラデシュ・スタディ・ツアーには何人もが学生が個人的に参加をしてきました。また宗教活動センターを核にしながら、様々な分野でのボランティア活動が随時行われ、献金も献げられてきています。そして本学卒業生による同窓会は発足当初から、生涯学習とともにボランティア活動を柱とし、現在もボランティア事業部において活発に活動を続けています。このような長きにわたる蓄積とエトスを土台にして、それらの体系化制度化を行ったのが21世紀の歩みだったというわけです。

本学の歴史を通して造り上げてきたその成果は、サーバントリーダー育成に向けた教育モデルとして、今後さらに青山学院内外で生かされていくことが期待されます。

#### 共生社会実習A・B・C・D(1)ab・D(2)・E

##### A：自然との共生

いろいろなハンディをもつ人々が自給自足の生活をされている信州共働学舎で、農作業や動物の世話を通して自然や他者との共生を学びます。

##### B：農作業・アジアアフリカとの共生

那須にあるアジア学院でのワークキャンプに参加して、農作業などを行い、アジア・アフリカの若きリーダーたちと交流します。

##### C：グローバル社会での共生

「国際協力プランナー入門」というワークショップ形式の集中講義です。

##### D(1) a：アジアとの共生（バングラデシュ・スタディ・ツアー）

バングラデシュの農村やスラムの小学校を訪問するスタディ・ツアーに参加します。

##### D(1) b：アジアとの共生（カンボジア・サービ斯拉ーニング・ツアー）

女性を就労支援する工房の製品開発や、日本語教師体験など、現地の活動に関わります。

##### D(2)：アジアとの共生（カンボジア・スタディ・ツアー）

孤児や貧困の問題の解決に取り組むNGOの活動に触れるツアーです。

##### E：フィールドワーク子ども

森のようちえんや青空保育、フリースクールなどでのフィールドワークを通して、子どもたちの育ちの環境について考えます。

##### 共生社会特別演習（沖縄を学ぶ旅）

沖縄の歴史・文化・社会について、事前学習と3日4日の現地訪問によって学びます。



共生社会実習 B<アジア学院ワークキャンプ>2018年



共生社会実習 D1a<バングラデシュ・スタディ・ツアー>



共生社会実習 D1b<カンボジア・サービ斯拉ーニング・ツアー>



共生社会実習 E<フィールドワーク子ども>



共生社会特別演習<沖縄を学ぶ旅>2013年

### Ⅲ 研究活動

#### 青山学院女子短期大学 総合文化研究所

##### —その誕生の背景と本学における高度の教養教育の実現に向けて—

前之園 幸一郎 (青山学院女子短期大学 第6代学長)

総合文化研究所は1991年4月に発足しました。それまで青山学院女子短期大学は、国文、英文、家政、教養、芸術、子ども、の6学科と一般教育科目のスタッフから構成されており、多様な専門領域に属する教員が専門家集団として教育研究活動に当たっていました。本学における教育の伝統的な基本的目標は、小さな専門家の育成ではなく、高度の教養に培われた円満な人格の形成をめざす高等女子教育にありました。その目標実現のために本学においてはそれぞれの専門分野における優れた人材が潤沢に教員スタッフとして配置されておりました。

しかしながら、高度の専門家としての教師集団はいつしか各学科の内部に固く高い壁をつくりだし、学科を超えた自由で闊達な研究上の相互の交流を困難にする弊害も生み出していました。その積年の「たこつぼ型」個人研究の実情への深い反省がなされることになり、多様で柔軟な専門分野の主体的な組み合わせによる総合的な研究の創造を目的とする総合文化研究所が創設されることになりました。

総合文化研究所の誕生によって本学教員は特定の研究プロジェクトへの参加により分野の異なる他分野の同僚教員との共同研究を積極的に行うことが可能になりました。さらにプロジェクトの一員として、共通テーマのもとに自分の研究活動を全体の研究の進捗とクロスさせながら多面的で総合的な知見に到達することが期待できるようになったのです。初年度の1991年には「キリスト教と文化」「情報社会とくらし」「アジアの食文化に関する研究」のプロジェクトが研究所最初の試みとして開始されました。そのうちの「キリスト教と文化」の成果は、青山学院女子短期大学総合文化研究所シリーズ1『キリスト教と文化』として2007年に市販の一般図書として発行されました。

研究所では毎年四つの研究プロジェクトが組織されました(※1)。各プロジェクトは、2年間の研究期間終了ごとにそれぞれの成果を研究報告書として作成し、それは『総合文化研究所年報』に掲載されます。その研究成果は日常の授業である「総合科目」(※2)を通じて、例えば「総合科目 平和」のように学生に還元されます。特に注目される代表的な「総合科目」に「アメリカの文化と社会」があります。これはアメリカの姉妹校である三つの女子大学との提携によるアメリカ直接体験を含む科目です。総合文化研究所の設立とその活動は本学のカリキュラムの刷新に大きな貢献を果たしました。

(※1) 2012年度より毎年二つ

(※2) 1982~97年度：一般科目、1998~2011年度：共通教育科目として開講



『キリスト教と文化』



『総合文化研究所レター』創刊号(1992年7月)、第2号(1993年3月)  
『総合文化研究所年報』第1号(1993年7月)、第9号(2001年12月)の表紙



御前様祭壇の前で祈願のオラシヨを唱える生月の辻のカクレキリシタン  
宮崎賢太郎『カクレキリシタン：オラシヨー魂の通奏低音』  
(長崎新聞社、2001年) 99頁より



平戸の田平天主堂



平戸ザビエル記念教会

## 総合文化研究所のプロジェクトに参加して

総合文化研究所の初年度（1991）の第1回共同研究プロジェクトは「キリスト教と文化」「情報社会とくらし」「アジアの食文化に関する研究」のテーマで組織されました。私は「キリスト教と文化」プロジェクトの一員として研究に参加しました。そこで多くの経験と貴重な学習の機会に恵まれました。

その中で特に印象的であったのは長崎県の隠れキリシタンについての調査旅行です。長崎県平戸市の生月島ではキリシタンたちが殉教した場所を巡り、また「歌オラシヨ」を聴くことができました。「オラシヨ」とはラテン語の「祈り (oratio) のことで、厳しい弾圧のもとで代々キリシタンたちの間で内密に口移しに伝承されているお祈りの言葉です。

次いで遠藤周作の『沈黙』の舞台となったキリシタン殉教の地である長崎県外海の出津を訪ねました。フランス人司祭ド・ロ神父が明治初期にこの地で困窮を極める村人たちのために保育所を開き、マカロニ、パン、製粉の技法やメリヤス織りなどの織物を教えたことを示す記念館は愛と奉仕の精神の素直な姿を物語っていました。



ド・ロ神父が設計した出津教会（1882年築）



ド・ロ神父記念館前に立つド・ロ神父像



1883年、ド・ロ神父が地元住民を救うため教育や授産事業を行う拠点として設立した出津救助院



ド・ロ神父記念館内展示

写真4点：LINEトラベル「ド・ロ神父の遺徳を偲ぶ長崎県外海地区」サイトより

# Ⅲ 研究活動

## 学芸懇話会

八耳 俊文 (青山学院女子短期大学 第8代学長)

本学の教員と学生の学芸に関する研究活動を助長し、教養を深めることを目的に設立された会で、1967年度から2000年度まで存続した。設立の背景には学園紛争があり、教員と学生が学芸を通じ交流を深めることが意図され、会の名称の由来となっている。会員は専任教員の正会員、学生の学生会員、その他卒業生などの賛助会員が定められていた。主な事業は①講演会等の開催、②会誌『学芸』の発行、③学芸懇話会シリーズの出版で、教員と学生から成る集会委員と編集委員が実務を担い、会員が払う年会費により運営された。

### 講演会の開催と『学芸』の発行

学生と教員が交流し互いに高めあうことをねらいとし、学生を対象とした講演会が積極的に催された。講師の人は学生の希望、教員の伝手を通じなされたが、そこに時代を読むことができる。筆者は1990年度より集会委員となり、1994年度と1995年度は同委員会の長を務めたが、在任中最も多くの参加者を得たのは1994年6月開催の大江健三郎氏講演「文学をまなぶことは人生に役立つか？」であった(図1)。懇話会は講演会だけでなく講習会、音楽会も開いた。

会誌『学芸』は教員と学生をつなぐ雑誌として発行され、教員や学生の原稿が載る一方、インタビューやアンケート、座談会を実施し、編集委員は工夫を凝らした。最初は教員主導で誌面が作成されたが(はじめの号は清水英夫氏や深谷浩氏が尽力した)、最後は学生が企画編集するようになり教員は補佐にまわった。この変化は表紙を見れば明らかである(図2)。学内で宗教活動委員会や学生部委員会などの諸活動が盛んになり、時代と状況に応じ変容したのである。1995年3月発行の号では「こしばらく《学芸》編集委員会は新しい方向を探る道筋を求めてきた」と誌している。



(図1) 大江健三郎氏講演会(1日目)



(図1) 講演会の大教室から会場を移し質問に応答する大江健三郎氏(2日目)



李進熙氏講演会 1994年11月



(図2) 『学芸』の表紙5種。創刊号(1967年)、第28号(1989年)、第29号(1990年)、第32号(1993年)、最終号(2001年)  
誌名は創刊時に「学芸」と決まり、中国古代の碑文にある隷書体の文字が題字に使用された。第29号より誌名は「GAKUGEI」と改まる

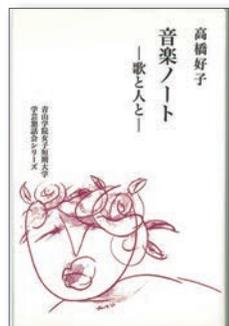
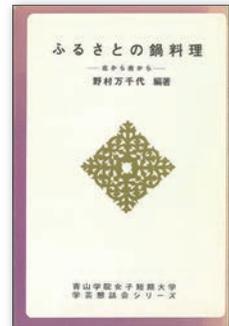
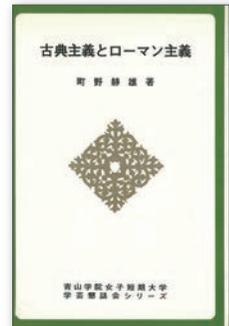
## 学芸懇話会シリーズ

懇話会事業として本学教員による単行本を刊行した。その数は1968年度から2000年度まで22冊になる。本シリーズの読者対象は学生を想定されていたが、実際には専門的や進取的なものも少なくなく、判型はB6変型で小ぶりながらも、本学教員の力量と意気込みが発揮された叢書となった(図3)。

執筆者の所属は、一般教育が2名、国文学科が7名、英文学科が6名、家政学科3名、児童教育学科2名、教養学科2名で、内容も文学関係が多い。国文学では源氏物語を中心とした平安朝文学を考察するものが3冊(森野宗明、河内山清彦、藤本勝義)。円仁書状の注釈・考察(青木孝)、奥の細道を中心とした芭蕉論(平井照敏)、一人称詞論からの中原中也と山本周五郎論(岡崎和夫)、フロイトやラカンを基軸とする村上春樹論(小林正明)が著された。英米文学では19世紀の文豪カーライル論(菊地裕)、19世紀のラファエル前派運動とロゼッティ論(向山泰子)、20世紀の古典主義とローマン主義論(町野静雄)、20世紀英国詩集(加島祥造)、19・20世紀米国の女性小説家論(稲澤秀夫)、ロシア文学ではキリスト教との関わりでトルストイ論(森泉弘次)が書かれている。このほか松崎巖は欧米諸国の音楽と子供の世界を通覧し、高橋好子は個人史をまじえた音楽ノートを遺し、川瀬一馬は自らの1968年夏の欧米旅行記をまとめた。

教養学科や家政学科の教員も著し、シリーズを多彩なものとした。戦後の代表的論客のメッセージを読む(梅津順一)、噂や流言を情報の観点より取り上げた(渡邊良智)、箸をめぐる文化誌(橋本慶子)、全国の鍋料理の沿革・歴史と作り方(野村万千代)である。他に、前之園幸一郎はピノッキオを子どもの生命の問題との見方にとりイタリア近代教育史をまとめた。この問題意識は島崎通夫の教示によるものであったが、島崎は20世紀フランスの古生物学者で神父であったテイヤール・ド・シャルダンの生涯と思想による1冊を執筆し、生命の論理と生の倫理を問うた。本学の教員の関心と成果を示す豊かなシリーズであった。

(図3) 学芸懇話会シリーズ第1巻、第5巻、第13巻、第22巻  
第1巻から第12巻までの装丁は佐々木仁氏(元家政学科)  
第13巻から第21巻までの装丁は奥村健一氏  
(元家政学科・現代教養学科)  
第22巻表紙は掛井五郎氏(元児童教育学科・芸術学科)画



# Ⅲ 研究活動

## ギャラリー

阿久津 光子 (現代教養学科国際専攻 教授)

青山学院女子短期大学はチャペル、中庭や図書館、体育館、青山学院講堂、学生食堂、校舎内の廊下、シオン寮、中軽井沢などいたる所に絵画や彫刻、版画、立体や平面作品などが設置され、学生たちが日常的に優れた芸術作品と直に触れることができる豊かな環境を創ってきた。2010年に開学60周年を迎え、そして2012年度からの現代教養学科と子ども学科の2学科への改組という節目に『美術所蔵品図録』(以下、『図録』とする)を刊行し、各作品の記録も含め、コレクションやギャラリー設立の経緯、短大ギャラリーの企画展などについてもまとめられた。本学の多彩な美術作品のコレクションは100点を優に超えるが、当時関わった先生方からの執筆資料なども参考に振り返ってみる。

「作品収蔵および短大ギャラリー企画展の記録」(資料パネル:『図録』p.75)に経緯の概略を見ることができる。当時、青山学院の中で唯一常設の短大ギャラリーは、1983年短大チャペルの建設とあわせて開設されたが、本学のコレクションはその5年前「1977年秋頃に、教育の一環として優れた美術作品を学生達に触れさせるべく、積極的に美術コレクションを始めようとの機運が起こり、最初の環境整備委員会(美術作品選定・学内諸整備・他)がもたらされた。」(『図録』p.6より引用)とあり、キリスト教信仰に基づく教育を行う本学に、芸術に関心の高い土壌があったことがわかる。

当時の島崎通夫学長の発案で、チャペルと宗教センターの間にギャラリーが設けられ、ひとつのまとまった空間をなすこととなった。また1989年芸術学科創設にあわせ、参考資料として用意された著名な芸術作品がコレクションに加わった。

短大ギャラリーが設置されたことで、1985年以降作家展が企画され、出品作家の作品がコレクションに加わるようになったが、「女子短期大学なのだから女性美術家の作品も学生に見せていこう」(『図録』p.10)との提案で「女流作家展」を開始し、2003年まで19回の開催を重ねた。2004年以降、「短大企画美術展」として男女の区別なく



教職員作品展 (1984年3月)



世界の椅子展 (1987年9月)



学内公募展 (2003年9月)



英文学科展「平和をつむぐ1000人の女性」展 (2008年4月)



21st おーる あおやま あーとてん '10 (2010年6-7月)

優れた作家の作品展を開催してきたが、2012年の改組をきっかけに2011年度以降はコレクションを停止し、代わりに学生に向けた新たな展示企画を増やしてきた。

ギャラリーの運営は設立当初は環境整備委員会が、後に広報企画委員会が担当し、美術系教員が委員となり企画運営してきた。年間を通してさまざまな展覧会が開催されたが、ギャラリーは短大内だけでなく青山学院交流企画展として「おーる あおやま あーと てん」および「Art クリスマス AOYAMA in Gallery」では幼稚園児から大学生まで学院の全設置学校から作品が展示され、青山学院内の美術交流の場としての大切な役割も果たしてきた。

短大企画として、毎年青山学院創立記念日(11/16)を含む会期の「創立記念所蔵作品展」では本学のコレクションから普段目に触れにくい芸術作品を展示紹介してきた。また短大教員による「美術系教員作品展」、外部団体による「キリスト教美術展」、短大や青山学院ゆかりの作家の作品展と、図書館企画による貴重書コレクションの展示「図書館コレクション展」を2~3年交代で開催した。

そのほか、2012年の改組前は各学科企画の展示も行われ、改組後は2学科共通の現代教養コア科目を紹介展する展示、教員と学生による「新入生のためのブックレビュー展」が開催された。また学生の活動の発表として、日頃の授業の成果である学生作品の展示、学年末の卒業制作展、ボランティア活動報告展、新学期や青山祭には学友会や部活動による展示など、毎年さまざまな企画案のもと運営されてきた。また短大同窓会が主催する卒業生の作品展は1984年から現在まで続いている。

本学の閉学が決まり、2019年より青山学院女子短期大学70周年記念ギャラリー展「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」という全4回の企画展を開催してきたが、短大ギャラリーは2021年4月以降は新設されるジェンダー研究センターに移管され、企画運営が引き継がれてまた新しい歩を始めることとなる。



掛井五郎絵巻展(2014年5-6月)



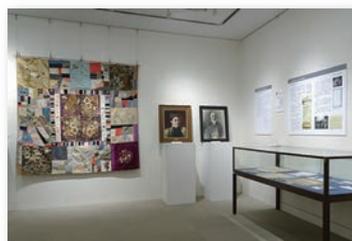
図書館コレクション展ギャラリートーク(2015年10月)



キリスト教美術展(2016年10月)



Art クリスマス AOYAMA 展(2017年12月)



「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」展 vol.1 (2019年5月)

## IV 学生の活動

### 『青山学院女子短大新聞』にみる女性・結婚・社会

小林 瑞乃 (現代教養学科日本専攻 准教授)

日本初の短期大学制度の施行により1950年4月に開学以来、本学は世間の関心を集めた。そこに集った学生達は何を考えどんな思索をしていたか。その生の声や内面的葛藤を『青山学院女子短大新聞』※の中に探りながら、短大の歴史的意義について考えていきたい。※1951年6月15日創刊、現存する最終号は1974年5月27日第107号

短大は女子生徒の将来を広げる進学先として人気を集めながら、当初から花嫁学校だとか社会への視野が狭いといった否定的評価もなされていた。学生達はそうした批判を受けとめながら、学生の本分や社会的責任を強く自覚していた。女性の大学進学率はまだ低く短大進学者が少数であった1950年代には、自由に思考し考えを述べられる学生であること自体が「大いなる喜び」だと述べていた(例えば「論説 私達の学生生活—新入生を迎えもう一度反省を—」1954年6月7日)。当然のように、学生の主体性の無さや社会への無関心の克服が訴えられていた。

1960年代以降、「女子大無用論」「女子大亡国論」など批判的見解が一層強まっていく。さらに、短大卒が「お嫁さん」には手ごろだという男性の感覚や、「家つき、カーつき、ババーぬき」に象徴されるように女性も収入や社会的地位、出世の可能性をあてに高学歴卒を理想の結婚条件に考えるなど、将来の安定を得る手段としての結婚観があり、またそれが短大は花嫁修業の場だといわれる要因にもなった。家庭に入る女性を「平凡」、仕事に生きる女性を「男勝り」とレッテルを張り、女性を揶揄する言葉も氾濫していた。そんな風潮の中で「結婚」の問題を考えるのは、簡単ではなかったはずである。

しかし、主体性を失って恋愛や結婚に埋没していくことへの抵抗感、「適齢期」の社会的圧力に流されず自らが選び取る人生、男女の対等な関係性と愛情を基盤とした結婚によって家庭を築きたいといった切望が数多く記されていた(例えば「考えよう! 私達女性の生き方」1964年1月27日、「結婚は絶対のものか—家庭における自己の確立を」1965年11月1日、「女+結婚=幸福?—自立への道を模索しつつ—」1973年11月30日)。男女関係に「互いの人間性を喪失させてはならない」という確信も記されていた(「婦人問題を考える」1971年10月31日)。

つまり1970年前後のウーマン・リブ運動の影響よりも、それ以前から自律的に思考する姿勢が



卒業アルバム 1966年3月より



あって、そこから生み出された未熟ながらも熱い文言の中には、現状を突き破り未来を構築する可能性を感じさせられるのである。

短大生の立場を自覚し変わらぬ社会の実情をみつめ時には空しさを感じ、それでも諦めないしなやかな強さもあった。

「現在の社会体制は、いくらウーマン・リブだと騒いだところでやはり男性中心」で、企業は能力よりも使うのに都合よい人材を求め、女は家を守れという概念が根強くある今日、「女性がひとりの人間であるという意識を持ちつつ、男性と対等に生きて行こうとするのはなんとむずかしいことであろう」との思いも吐露されていた。どうせ女だからと割り切ってしまう「後は実に簡単」で「安全な道」が用意されるだろう。だが「女としての甘え」に浸っていても女性は進歩しない。だから諦めずに頑張って、「私だけにしか見つけられないすばらしい何か」を探し求めようとするのであった（「雑感」1973年7月10日）。

また、教育とは「個人が持っている可能性、才能を全面的に引き出すため」のもので「男子」と“女子”という性のわくだけで、ある一面しか引きだされないとしたら、真の教育とはいえない」という本質を突いた指摘もあった（「現代女子教育批判」1972年11月23日）。

このように、常に世間の風評にさらされ揺れ動きつつ、自己の存在意義、「自立」や「主体性」の確立を模索していた。女性であることの前に人間であることを抛り所として男性との対立ではなく共生が目指され、男女の枠をこえて各々が自分を最大限に活かす社会への希求があった。

閉塞的とみなされがちな短大にあって、一個の自由な人間として成長を求める精神的な格闘が続けられていた。新聞はごく一部の見解を記した断片的な記録であり、紙面に載らない共感、異論や反感もあっただろう。だが、見解の相違を含め他者を知り認め合う契機、思想的な触発の場となったことも示唆されている。積み重ねられてきたその来歴の上に、多様性を指向する現在がある。そこに、歴史的意義の一つがあるのだと思う。



卒業アルバム 1974年3月より

## IV 学生の活動

### サマーキャンプ・イン・軽井沢

伊藤 勝啓 (青山学院女子短期大学名誉教授・前宗教主任)

「サマーキャンプ・イン・軽井沢」は宗教活動の学生たちにとって思い出深い行事であったが、あの場所は何と素敵なおとこであったことだろうか、南側には白煙を上げる浅間山を眺めながら、朝の祈りから一日が始まる。ある時、当時学長であられた島崎通夫先生が一言も言葉を発することなく祈りの姿勢を取っておられたこと、忘れることができません。

前日の夕飯は中庭でのバーベキューで楽しいひと時を過ごすのが定番でした。ここには兎やハトがやって来ますが、ある時とんでもなく大きいクジャクが姿を現しました。そんな珍しいこともありました。

朝ごはんのときは、外では学校に通う小学生の賑やかな声が朝食をとるわたしたちの耳に響いて来ます。食後、朝のプログラムに向かい、午後には軽井沢方面に自転車で向かう人たち、近隣の、池もある景観の良い遊園地に赴く学生も(教師も)おりました。旧軽はバスの乗り降りをも兼ねる商業地となりました。

私はこのところに深くかかわり、感謝の思いで一杯ですが、先人達が何を選ぼうとしたのか、考えさせられています。



1996年頃



1999年頃



中軽井沢寮 1965年完成

夏冬の修養会の変遷 『青山学院女子短期大学六十五年史 資料編』より

学生がイニシアティブをとるものとしては宗教部があり、…秋2回2泊3日の退修会、夏休中4泊5日の退修会(追分寮)…などを行い (p.619 / 『青山学報』1953年6月より)

修養会は年2回…夏期修養会は9月始めに追分にある東洋英和の寮を借りて行い…学生76名、教師13名…冬期修養会は2月下旬に行われる予定…近年参加者が増大し盛況を見るに至って…(p.621 / 『青山学報』1963年12月より)

学生修養会は校友会の中の宗教部と大学の共催で行われてきたが、1965年以降、従来の信者中心の会から、対象を一般学生や未信者の教職員を中心とするものになった (p.632 / 『青山学報』1996年6月記載の体験談についての補注)

「みずさき」誌の創刊号は1968年に冬期修養会報告書として発行されている (p.627 / 『青山学報』1963年12月より)

夏は夏休みに入った直後に中軽井沢寮で、又冬は2月の休みに天城山荘で…この3、4年間の学生の参加者は40名~70名、教師の参加は10名~18名 (pp.623~624 / 『青山学報』1980年10月より)

修養会は、夏は中軽井沢寮(1965年完成)、冬は天城山荘というスタイルが定着し、参加者もノンクリスチャンが多数を占めるようになった。(p.625 / 『青山学報』1980年10月記載の報告記事についての補注)

毎年2回、修養会(86年度からは「天城冬の集い」)…夏期学校(87年度から「サマーキャンプ・イン・軽井沢」)…初期には真鶴・三浦などで行われたようで、天城山荘は73年度以降(地震災害で道路が危険になった77年度を除いて)一貫して用いられている (p.627 / 『青山学報』1996年6月より)

サマーキャンプは2011年の東日本大震災を契機に中止され、代わって被災地支援ボランティアが実施されるようになった。サマー・キャンプを惜しむ声もあったが、代わって9月末にオータム・リトリートが行われた。(p.635補注)

## ボランティア活動

吉岡 康子 (青山学院女子短期大学宗教主任)

本学では被災地支援ボランティアを継続的に行いました。1995年に発生した阪神・淡路大震災においては、青山学院宗教センターが呼びかけた被災地支援ボランティアに2名の短大生が参加し、神戸で支援物資の仕分け、子どもたちとの遊び相手などの活動をしました。

2011年3月11日、東日本大震災が発生し短大として被災地支援チームを組織、派遣することとなりました。同年7月、学生14名と教職員5名からなる第1回被災地支援チーム「Blue Bird」(学生たちが命名、青山学院の青と、幸せの青い鳥の様に小さくても、小さな幸せを運びたいとの願いがこめられています)が、岩手県宮古市と釜石市を中心に活動しました。

その後、春期と夏期の休暇ごとに宮古市を中心としてBlue Birdは活動し、延べ約400人の学生が参加をしました。活動内容は、当初の緊急支援的な瓦礫撤去などの作業から、仮設住宅でのお楽しみ会やコンサートなどの実施、追悼式などでのハンドベル演奏奉仕など多岐にわたりました。2014年には、教育・文化・産業などの活動での相互の連携を図ることを目的に「青山学院女子短期大学と宮古市との連携協力に関する協定」を締結しました。

2016年に発生した熊本地震ではBlue Birdメンバーが募金活動を行い、また東日本大震災被災地支援の経験を活かして熊本へのボランティアチームを組織、派遣することとなり、2018年まで3回熊本で、瓦礫撤去や農業支援などの活動を行いました。

近年、短大宗教活動センターが主催したボランティアとしては「おすそ分けプロジェクト」(路上生活を余儀なくされている方々への炊き出し用の米、割り箸、カイロなどを学院内に呼びかけて集め、支援団体に送付)、「フード・プロジェクト」(家庭の余剰食品を困窮家庭等にフードバンクをとおして届ける活動)などを継続的に行ってきました。



東日本大震災被災地支援ボランティア活動  
被災された住宅で／岩手県宮古市 2011年7月



仮設住宅でのお楽しみ会  
／岩手県宮古市 2013年8月



追悼式でのハンドベル演奏奉仕  
／岩手県宮古市 2015年3月



熊本地震被災地支援ボランティア活動  
農業支援／熊本県 2016年9月



被災地スタディツアー／熊本県 2018年9月

## IV 学生の活動

### 学友会活動

1951年6月に発行された『短大新聞』創刊号には、「本年度学友会幹事決定」という見出しで、1951年度の委員および主要行事について書かれている。それによると学友会構成委員は会長1名、副会長2名、書記2名、会計1名となっている。その年予定されていた行事は「関東学院短期大学他2校との文化的な交歓会、運動会、研究発表会、運動場建設のためのバザーなど」であった。1952年度から2019年度まで、およそ10年毎の学友会行事の変遷を表にまとめた。

初期(1970年代まで)の活動で目立つのは会議の多さである。1972年は中央委員会だけで計9回行われている。この年は後述するように青山祭がいったん中止になったり次期役員選挙が難航したり、いろいろあったこともあるが、中央委員会の議題は、青山祭の話題だけではなく「塀問題」「大学クラブ問題」「学友会のありかた」などにわたっている。

1980年代からはおもしろ的な企画が多くなっていく。80年代半ばからダンスパーティーが行われ、90年代からは学外のディスコやクラブを貸し切ったのパーティーも企画されていた。例えば1994年度のダンスパーティーは早稲田、清泉女子大との共催でジュリアナ東京にて、1995年は六本木マハラジャにて行われている。

運営的な観点からみると、1950年代の半ば頃から一般学生の無関心さが問題となってくる。1954年の選挙総会では出席者が学生数の半分に満たなかったことを嘆く新会長のことばが寄せられている(『短大新聞』10号)。その中で新会長について森山郁代は、「この学校では個人主義ということが正確にうけとられていなくて、個人主義がエゴイズムに傾いて」おり、「短大の学生一人一人完全な個人主義となってお互を尊重しあうならば、会長選挙の時のみじめさはなかったであろう」と痛烈な批判を展開している。1955年発行の青短新聞20号では、「学友会の主人公は私たちに」というタイトルで新旧学友会委員の座談会の模様が掲載されている。座談会では学友会への一般学生の無関心さ、

菅野 幸恵 (子ども学科 教授)



学友会部室 1956年完成  
(2階建て部分。左の平屋部分は1948年建設の別館)  
学友会が部室建設資金を調達するため、1952年から55年まで音楽会を開催。後援会、卒業生の寄付なども合わせて約250万円の資金が集まった。(65年史通史編 pp.85-87)



学友会部室廊下  
看板は左から「宗教部」「国劇班」「E・S・S」「音楽鑑賞班」「音楽班」「美術班」



学友会部室内部



学友会部室内部 (1958年)

クラブ活動の不活発さが指摘されている。同じ紙面では学友会への親しみにくさを訴える一般学生の声も寄せられている。座談会のなかで学友会のメンバーが学生を集めるために、出席をとったり高圧的だったと自らふりかえっていたように、関心を向けさせようと奮闘する学友会の姿勢がうまく伝わらず、一般学生との乖離につながったようにも見える。1967年度には会長・副会長の選挙結果を承認する定例総会の定数が満たず、選挙のやり直しという前代未聞の事態も起こる。学生の無関心さを嘆く学友会役員の声は毎年のように学友会会誌等でみられているが、それらは同じ学び舎に通う同輩への期待の裏返しでもあるように思える。

たとえば『あおやま第3号』で1968年度の副会長は「私達、青短生一人一人は、決して無気力ではないはずですよ。ところが、千何百人集まった結果として、無気力になってしまう。この団体のもつ致命的な短所も長所に変えることはできます」と述べている。同紙14号では、1979年度の会長が学生が本部に対して非協力的であるとして「合同コンパの掲示などは、即その日に申し込んだりする程、注意深いけれど、青山祭実行委員を募集してもなかなか集まらない。あげくの果てに、「このままでは青山祭はできない！」と立て看板を出しても、二千人もいる青短生の反応は、情けないほど僅かだった」と述べている。ただ彼女は「しかし」と続けて「青短に入学したのならば、青短生として学園内でも存分に学生生活をエンジョイしてほしいと私は思う」とも述べている。学友会役員と一般学生との乖離は1980年代半ばまで続く。1982年度会長の古川二三代は「青短生のあなたへ 去りゆく私からひとこと」として『あおやま17号』に思いを寄せている。

参照：『青短新聞』復刻版、学友会会誌『あおやま』1号～最終号

青短生のあなたへ 去りゆく私からのひとこと

学友会会長 古川二三代

専攻科へ行かないかぎり、短大生活は二年間で、上下のつながりをもつことは極めて難しい。まして青短生の大部分は青学大、及び他大学のサークルに参加するのであるから、横のつながりすら危うい。

青短生に愛校心はあるのだろうか。確かにプライドはうかがえる。だが、本当に好きであったなら、何故もっと学校のことに関心を示さないのだろうか。学生の持つプライドは青短という学校に対するものではなく、単に学校の名前だけ、という気すらしてくる。

これは、私の杞憂と信じよう。

名前だけの青短生なり、就職へのステップとしてのみ学校を利用する。自分がそうなることを恐れた私は、入学した春、学友会室を訪れたのだった。そこでの二年間、私は学科を超えた友人と巡りあい、素晴らしい先輩、可愛い後輩に恵まれた。人間関係に悩み、身を細くした時期もあったが、そういったことを通して得た教訓は、社会に出た私を導いてくれることと思う。

大好きな彼は下宿住まい。夕御飯を作ってあげたり、セーターを編んであげたり、とにかく何かをしてあげたいかならう。そして彼のことももっとももっと知りたくならう。

学校も同じ。大好きな青短だから何かをしたい。学校をもっと知りたい。そしてそれをすべて可能にするところが学友会であり、各クラブだ。青短生一人一人のご一考を望んで終わりとしよう。

## IV 学生の活動

### 青山祭

菅野 幸恵 (子ども学科 教授)

本学の文化祭は、当初学院の周年行事である青山学院記念祭に合同する形で行われていた。1954年青山学院創立80周年を記念して、大学と短大の合同文化祭として青山祭が行われることになった。第1回の合同青山祭は、大学・短大各クラブの催し物を中心に行われ、その多くは展示だったようである。その後は大学との合同で青山祭が行われることが続き、短大独自で青山祭が行われるようになったのは、1965年からである。本学創立15周年にあたるこの年に、学友会本部が「短大としての方向を何らか打ち出そうとしている意気込み」をみせ、独自の実行委員会を立ち上げて、主体的な学園祭運営を目指した。この年のテーマは「短大生よめぎめよう！」であった。このテーマを掲げた理由として、当時の実行委員会は、青山祭のパンフレットで「私たちの眠っていた主体性を呼びさまし、全学生が一体となって考えることをテーマとして」このスローガンを掲げたとしている。その背景には、大学がマンモス化するに伴い「学生の主体性がなくなった」「真剣に学ぶ学生が少ない」という批判がなされることがあった。当時の学生は「だからといってそれに目をつぶって良い」ということにならず、「現在の私たちの置かれている立場から、多くの問題点を取り上げ、この学生生活をより有意義なものとし、かつ女子短大のあり方をもう一度見直してみたい」と考えていた。音楽のタベのゲストは、デュークセイエス、スリーグレイセスであった。公開討論会「短大生の主体性は何処に」も行われた。

青山祭のテーマや内容は時代と共に変化していった。ライブ(音楽祭)や講演会(のちにトークショー)のゲストの顔ぶれもその時代を代表するような人ばかりで、短大生の関心のありかをうかがわせる。(テーマ、ライブ一覧)

新聞記者や女性(婦人)問題に詳しい識者を招いた講演会のような硬派な企画がある一方で、いわゆるフィーリングカップルのような企画も行われていた。

短大単独で行われるようになってから毎年行われてきた青山祭であるが、1972年中止の危機に見舞われる。その原因は「学生の無関心」であった。当時の青山祭のパンフレットによると、青山祭は例年通り準備が進められていた



青山祭 1958年



青山祭 1959年



青山祭 1965年(短大独自の第1回)



青山祭 1968年(旧校舎の中庭での前夜祭)



青山祭 1968年頃(南館食品科学実験室での展示)

ものの、実行委員は名ばかりで、実際に動こうとするものはわずかであった（呼び出そうと電話をすると居留守を使ったり・・・）。そこで業を煮やした学友会本部が、全学生に青山祭を実行するかどうか全学投票を行った。しかし投票数は半数に満たず、学友会は中止という決定をする。中止という決定を出した後、文連体連本部中心に中止反対署名運動がおき、その署名をみた学友会が「もう一度、賭けてみよう」と1か月の準備期間で青山祭を行った。翌1973年も学友会は人員不足により今年こそ決定的にできないと考え「中止」の方針を打ち出す。8割以上の学生が青山祭はあった方が良くと答えるものの、実行委員になってやろうとするものはほとんどいなかったという。急遽行った説明会で自主的に実行委員を募り、無事青山祭は開催されることになった。当時の学長幸田三郎先生も指摘しているが、毎年やってきたからという理由だけで、無反省に続けることが果たしていいのかと、学友会本部が学生全体に問いかけたことの意味は大きい。青山祭はあるのがあたり前、やってもらうものという意識がこの時期からあったことにも注目しておきたいし、代々の学友会長が述べていた学生の非協力が顕著に表れたのだろう。

参照：『青短新聞』復刻版、学友会誌『あおやま』1号～最終号



青山祭 1973年



青山祭 1976年



青山祭 1978年



青山祭 1981年



青山祭 1986年



青山祭 1993年



青山祭 1999年



青山祭 2009年



青山祭 2019年

# IV 学生の活動

## 学友会行事・青山祭の変遷

菅野 幸恵 (子ども学科 教授)

### 学友会の主な活動・行事 (参照:『青短新聞』『あおやま』)

#### 1952年度

|       |   |
|-------|---|
| 6月    | 四校交歓会<br>フェリス、関東学院、恵泉、青山の4短期大学の、<br>親睦および宗教的結束を目的とする交歓会 |
| 7月初旬  | 球技大会 クラス対抗  |
| 7月下旬  | 全国女子学生協議会総会   |
| 10月中旬 | プレイデイ   |
| 11月中旬 | 研究発表会   |
| 11月下旬 | 第5回近藤賞金スピーチ・コンテスト<br>学友会役員改選<br>学生懇談会(毎月1回)             |

#### 1963年度

|        |                          |
|--------|--------------------------|
| 1月下旬   | 予算審議会                    |
| 1月下旬   | 講演会 佐藤春夫氏                |
| 4月中旬   | 学友会総会                    |
| 5月中旬   | 5短大交流会(学習院、昭和、共立、実践、青山)  |
| 5月下旬   | 青山祭についての話し合い(大学一部、二部、短大) |
| 6月初旬   | ダークダックスリサイタル(運動部主催)      |
| 6月初旬   | 青山祭三部合同協議会               |
| 6月中旬   | 青山祭実行委員会(7, 9, 10月)      |
| 6月下旬   | 教授学生懇談会                  |
| 6月下旬   | パーティーその他の催し物に関する話し合い     |
| 6月下旬   | 学習院、昭和、実践、青山の4短大で懇談      |
| 10月中旬  | 学習院、昭和、青山の3短大で懇談         |
| 10月下旬  | 青山祭                      |
| ~11月上旬 |                          |

#### 1972年度

|       |   |
|-------|---|
| 1月下旬  | 中央委員会   |
| 2月初旬  | リーダーズキャンプ   |
| 4月初旬  | 学友会オリエンテーション  |
| 中旬    | 中央委員会   |
| 5月初旬  | 中央委員会<br>春のつどい<br>部長会議  |
| 5月中旬  | 青山祭実行委員会発足<br>定例会(流会)<br>青山祭実行委員会リーダーズキャンプ                                |
| 5月下旬  | 対話集会  |
| 6月初旬  | 臨時総会(流会)<br>中央委員会<br>青山祭の開催について投票<br>部長会議<br>対話集会<br>映画会<br>中央委員会<br>対話集会 |
| 9月中旬  | 中央委員会<br>部長会議   |
| 10月下旬 | 代表委員会<br>会長・副会長立候補 第一次公募  |
| 11月中旬 | 会長・副会長立候補 第二次公募<br>院長との話し合い   |
| 下旬    | 青山祭   |
| 12月初旬 | 中央委員会<br>青山祭反省会<br>部長会議<br>対話集会   |

#### 1982年度

|       |                             |
|-------|-----------------------------|
| 4月初旬  | リーダーズキャンプ                   |
| 下旬    | グリーンパーティー<br>春のつどい          |
| 5月下旬  | 学友会総会                       |
| 6月初旬  | 青山祭実行委員募集開始<br>『アイビー第12号』発行 |
| 11月初旬 | 青山祭                         |
| 12月初旬 | クリスマス映画会「テス」                |
| 1月初旬  | 会長・副会長立候補、選挙                |
| 2月初旬  | 新役員決定、引継ぎ                   |

#### 1992年度

|       |                          |
|-------|--------------------------|
| 3月中旬  | リーダーズキャンプ                |
| 4月初旬  | 春の集い                     |
| 中旬    | グリーンパーティー                |
| 5月初旬  | 学友会主催 東急オリエンターリング        |
| 下旬    | 学友会総会                    |
| 10月下旬 | 青山祭、ハロウィンパーティー           |
| 11月下旬 | 学友会会長・副会長信任投票<br>秋期プレイデイ |
| 1月中旬  | 新役員決定、引継ぎ                |

#### 2002年度

|     |  |
|-----|--|
| 3月  | リーダーズキャンプ<br>学友会誌『あおやま第37号』発行  |
| 4月  | 学友会会報『青短通信簿第1号』発行<br>予算折衝<br>ギャラリー展<br>バリケード<br>春のつどい<br>部室開放 DAY<br>クラス委員会<br>グリーンパーティー<br>定例総会 |
| 5月  | 学友会会報『青短通信簿第2号』発行<br>部長・会計会議   |
| 6月  | クラブ・コーチ顧問懇談会<br>ダンスパーティー(早稲田大学共催イベント)<br>club CODE   |
| 9月  | 夏のリーダーズキャンプ<br>上級救命講習会   |
| 10月 | 第7回フォトコンテスト<br>第5回書道コンテスト<br>ランチタイムコンサート   |
| 11月 | 青山祭<br>第6回短歌大賞<br>学友会会長副会長選挙<br>秋期プレイデイ  |
| 12月 | クリスマスパーティー   |
| 1月  | 新旧役員懇談会(引継ぎ会)  |

#### 2009年度

|     |  |
|-----|--|
| 3月  | リーダーズキャンプ<br>学友会会誌『あおやま44号』発行                |
| 4月  | ギャラリー展<br>予算折衝<br>春のつどい<br>定例総会<br>グリーンパーティー |
| 5月  | 第1回部長・会計会議                                   |
| 10月 | 青山祭  |
| 11月 | 秋期プレイデイ                                      |
| 12月 | クリスマスパーティー<br>クラブ・コーチ顧問懇談会                   |
| 1月  | 第2回部長・会計会議                                   |

#### 2019年度

|     |                       |
|-----|-----------------------|
| 3月  | リーダーズキャンプ             |
| 4月  | 春のつどい<br>定例総会         |
| 5月  | 第1回部長・会計会議<br>ボウリング大会 |
| 6月  | フォトコンテスト              |
| 7月  | 学長懇談会                 |
| 10月 | ハロウィンイベント             |
| 11月 | 青山祭                   |
| 12月 | クリスマス会                |
| 1月  | 第2回部長・会計会議            |

# IV 学生の活動

## 青山祭テーマ、ライブ一覧

| 年度   | 開催期間        |      | テーマ                                  | 音楽のタベ、音楽会、ライブのゲスト                     | 講演会、トークショーのゲスト                                       | 備考          |
|------|-------------|------|--------------------------------------|---------------------------------------|--|-------------|
| 1950 |             |      | 不明                                   |                                       |  | 短大発足        |
| 1951 |             |      | //                                   |                                       |  |             |
| 1952 | 11/15～11/16 |      | //                                   |                                       |  | 名称：文化祭      |
| 1953 |             |      | //                                   |                                       |  |             |
| 1954 | 11/15～11/17 |      | //                                   |                                       |  | 大学と合同       |
| 1955 | 11/19       |      | //                                   |                                       |  |             |
| 1956 | 11/21～11/23 |      | //                                   |                                       |  | //          |
| 1957 | 11/22～11/25 |      | //                                   |                                       |  | //          |
| 1958 | 11/21～11/23 |      | //                                   |                                       |  | 大学と合同       |
| 1959 | 11/3～11/5   |      | //                                   |                                       |  | //          |
| 1960 | 11/2～11/7   |      | //                                   |                                       |  | //          |
| 1961 | 11/3～11/5   |      | //                                   |                                       |  | //          |
| 1962 | 11/2～11/4   |      | //                                   |                                       |  | //          |
| 1962 | 11/1～11/3   |      | 現代社会の矛盾を解明し、学生の主体性を確立しよう             |                                       |  | //          |
| 1963 | 11/1～11/3   |      | 考えよう我等大学生の使命を                        |                                       |  | //          |
| 1964 | 11/18～11/23 |      | 不明                                   |                                       |  | //          |
| 1965 | 11/3～11/5   | 第1回  | 短大生よ、めざめよう！                          | デュークセイエス、スリーグレイセス                     |  |             |
| 1966 | 11/2～11/4   | 第2回  | すべてに 意気な！                            | 岸洋子                                   | 高田敏子、井上靖   |             |
| 1967 | 11/2～11/4   | 第3回  | 考えようもっと深く                            | 石井好子                                  | 入江徳郎、寺山修司  |             |
| 1968 | 11/2～11/4   | 第4回  | 広げよう目と心を！築こう我々の未来を！                  | 森山良子                                  | 家城啓一郎、山本直純   |             |
| 1969 | 10/31～11/4  | 第5回  | 不明                                   | 広瀬悦子、森山良子、ビリーバンバンほか                   |  |             |
| 1970 | 10/31～11/3  | 第6回  | 飛翔 -21 オへの歩み-                        | 森山良子、長谷川きよし、ソルティエ・シュガー、ニュー・ブルー・ストリングス | 羽仁説子、藤谷正造  |             |
| 1971 | 10/30～11/2  | 第7回  | 黎明への挨拶                               | 加藤登紀子、ビリーバンバン、                        | 庄司薫、松岡洋子   |             |
| 1972 | 11/22～11/24 | 第8回  | 不明                                   | 杉田二郎、ガロ、ブレット&バター                      | 中村メイコ  |             |
| 1973 | 10/31～11/3  | 第9回  | ふれあい                                 | 井上陽水、チュリップ、杉田二郎、オフコース                 | 山崎朋子   |             |
| 1974 | 11/1～11/4   | 第10回 | together                             | グレイプ、荒井由実、オフコース、山本コータロー&ウィークエンド       | 早乙女勝元  |             |
| 1975 | 11/1～11/3   | 第11回 | 蘇生                                   | 山田パンダ、クラフト、小坂恭子、ふきのとう                 | 黒柳敏子   |             |
| 1976 | 10/30～11/1  | 第12回 | DO!                                  | ハイ・ファイ・セット、クラフト、オフコース                 | 落合恵子、淀川干夏  |             |
| 1977 | 11/4～11/6   | 第13回 | Something New                        | ハイ・ファイ・セット、ケメ、カーニバル                   | 矢崎泰久、山崎千夏  |             |
| 1978 | 11/3～11/5   | 第14回 | Fly Together                         | 杉田二郎、カーニバル、クラフト、木戸やすひろ                | 見城美枝子  |             |
| 1979 | 11/3～11/5   | 第15回 | テーマなし                                | ハイ・ファイ・セット、カーニバル                      | 五木田武信  |             |
| 1980 | 11/1～11/3   | 第16回 | Ride on Wave                         | カシオペア                                 | マーシャ・クラカワー   |             |
| 1981 | 11/1～11/3   | 第17回 | Take Your Way                        | 原田真二&クライシス                            | 小堀杏奴   |             |
| 1982 | 11/1～11/3   | 第18回 | シンデレラ リバティアー -時間(トキ)を超えて-            | ブレット&バター                              | 後藤明生   |             |
| 1983 | 10/29～10/31 | 第19回 | Flash Generation 青短進歩自由夢(アオタンシンポジウム) | 松原みき                                  | 川本三郎   |             |
| 1984 | 11/3～11/5   | 第20回 | 娘ざかり 花ざかり                            | 中川勝彦                                  | 尾辻克彦   |             |
| 1985 | 11/2～11/4   | 第21回 | WOMAN -知・優・華-                        | 山本達彦                                  | 利根川裕   |             |
| 1986 | 11/1～11/3   | 第22回 | 彩 -Let's imagine-                    | 大江千里                                  | 糸井重里   |             |
| 1987 | 10/31～11/2  | 第23回 | 99%の perspiration                    | スターダストレビュー                            | 神津カンナ  |             |
| 1988 | 10/29～10/31 | 第24回 | 夢 100% -Girls be ambitious-          | カルロス・トシキ&オメガ・トライブ                     | 夏目房之介  |             |
| 1989 | 11/3～11/5   | 第25回 | Keep on Shining -見つけた、私、DIAMOND-     | UP BEAT                               | 日比野克彦  |             |
| 1990 | 11/3～11/5   | 第26回 | Attention Please -今、Global な視野で-     | 鈴木雅之                                  | 石田純一   |             |
| 1991 | 11/2～11/4   | 第27回 | 華夢 (come) With Us!                   | Baby's Breath                         | 田嶋陽子   |             |
| 1992 | 10/31～11/1  | 第28回 | 百華繚乱 -今、花盛り~                         | 吉田栄作                                  |  |             |
| 1993 | 10/30～10/31 | 第29回 | 日本 -青短獅子七変化~                         | GAO                                   | ピーター・フランクル   |             |
| 1994 | 10/29～10/30 | 第30回 | MORE LOVE, MORE POWER                |                                       | 中村福助   |             |
| 1995 | 10/28～10/29 | 第31回 | らしさ ~自分というブランド~                      | 泥八、藪蛇古屋、BANANA FISH, NO.9             | 中谷彰宏、高木美也子   |             |
| 1996 | 11/2～11/3   | 第32回 | REVOLUTION ~新しい創造の誕生~                |                                       | 安藤優子、桐島洋子  |             |
| 1997 | 11/1～11/2   | 第33回 | Blowin' ~未来へ向かって~                    | Something Else, SANKY FLAG            | 安積遊歩   |             |
| 1998 | 10/31～11/1  | 第34回 | Lovely Days! ~すばらしい日々~               | The Chopsticks & KILALA, BOOMER       | 中村橋之助(現芝罘)、川田悦子、渡辺一技                                 |             |
| 1999 | 10/30～10/31 | 第35回 | VIVA!! 最高の瞬間                         | THE HIGH-LOWS                         | 中村勤九郎(故18代目勤三郎)、宮城まり子、山本麻里安、水本早苗                     | 短大開学50周年記念  |
| 2000 | 10/28～10/29 | 第36回 | ONE                                  | HEADROCKS2000 ライブ                     | 中村勤之助、中村福助、アグネス・チャン                                  |             |
| 2001 | 11/3～11/4   | 第37回 | Be ambitious!                        | ゴスペラーズ                                | 平間室、中村吉右衛門、丸山浩路                                      |             |
| 2002 | 11/2～11/3   | 第38回 | Creating Peace                       | the brilliant green                   | 山咲トオル、故10代目坂東三津五郎                                    |             |
| 2003 | 11/1～11/2   | 第39回 | Viva La Festa                        | w-inds., weiwei wuu, 中鉢聡              | Y O U、郡司ななえ  |             |
| 2004 | 10/30～10/31 | 第40回 | 逢 ai                                 | Do As Infinity                        | お笑いトークショー(ロバート・スピードワゴン)                              | 学院創立130周年記念 |
| 2005 | 10/29～10/30 | 第41回 | 煌☆FUN                                | 玉木宏                                   | お笑いライブ(北陽・ベナルティ・オリエンタルラジオ他)、中村勤太郎(現勤九郎)、中村七之助、やまだひさし |             |
| 2006 | 10/28～10/29 | 第42回 | 隠だまり                                 | Aqua Timez                            | 蛭原友里、桜塚やっくん  |             |
| 2007 | 11/3～11/4   | 第43回 | 大和撫 GO!                              | 駒香                                    | MEGUMI、マリエ、忍成修吾                                      |             |
| 2008 | 11/1～11/2   | 第44回 | 『ECO∞JOY』                            | U V E R w o r l d                     | DAIGO、木下優樹菜  |             |
| 2009 | 10/31～11/1  | 第45回 | cycle ~わたしたちができること~                  | 加藤ミリヤ                                 | 安田美沙子、山田親太郎  | 学院創立135周年記念 |
| 2010 | 10/30～10/31 | 第46回 | Action!!                             | 伊藤由奈・B E N I                          | 加藤夏希、JOY   | 短大開学60周年記念  |
| 2011 | 10/29～10/30 | 第47回 | Smile ~笑顔は共通語~                       | 清水翔太                                  | トリプル玲奈、柳沢慎吾  |             |
| 2012 | 11/3～11/4   | 第48回 | Make Up! Wake Up!                    |                                       | 中村蒼、あべこうじ  |             |
| 2013 | 11/2～11/3   | 第49回 | Hand and Hand                        | 與真司郎(AAA)、フジヤマ                        |  |             |
| 2014 | 11/1～11/2   | 第50回 | 華 ~ Brilliant Moments ~              |                                       | 千葉雄大   | 学院創立140周年記念 |
| 2015 | 10/31～11/1  | 第51回 | Color                                |                                       | 吉沢亮、ダイヤモンド☆ユカイ                                       |             |
| 2016 | 10/29～10/30 | 第52回 | Girls, Be Ambitious.                 |                                       | 佐藤健  |             |
| 2017 | 11/4～11/5   | 第53回 | 漂                                    |                                       | 田中圭、田口淳之介  |             |
| 2018 | 11/3～11/4   | 第54回 | GREATEST WOMAN                       |                                       | 瀬戸康史、城田優   |             |
| 2019 | 11/2～11/3   | 第55回 | THE LAST QUEEN                       |                                       | 吉沢亮、賀来賢人   | 短大最後の青山祭    |

講演会、トークショーのゲストは実行委員会企画だけではなく、各参加団体のものも含む